

類白鳥

泉鏡花作

一

場所を云ふと、大方の人に直ぐ其の誰であるかゞ
解らう、且つ事柄が、聞えた伯爵家の世嗣の君に因
つて起つたのであるから、假に
何其郡

木の葉村として物語る。

常磐の松の濃い緑も、木の葉と云ふに異りはない
が、ものゝ名にすると何となく、風に、時雨に誘は
れて、二葉三葉はら／＼とするやうで物寂いから、
人数も少い、此村の、疎在な茅屋にも稱が適ふ。

稱が適ふと言へば、此村の百姓家の一室を借りて、
師走の暮だ、と云ふのに、置炬燵へ潜込んで居る男
が、釣をするでもなし、玄徳を待つでもなし、禪の
法を修するにあらず、昆論方壺思ひも寄らず、六韜
三略を読むでもないから、其處で自から行者不性
と號した、是も先づ相應しいが、實は開業醫後期試

験準備の最中。

處で、不性行者が部屋借の家は、木の葉村字袋田の何右衛門とか云ふのだけれども、其よりは疊屋の方が分解が早い。主人は疊職で、都合上停車場寄の町近に別世帯、職人三四人も使ふ處から、暮は分けて忙しい。旁々家内中其の方へ手傳に行つて、近頃本家には隱居の爺様萬平と、不行者ばかり。尤も本家ながら、此の方を疊屋の隱居所と云ふくらゐ、所有の田地は、大抵居廻りの百に預けて、耕作の方は、爺様が退屈凌ぎと、御冥加に鋤鍬を持つに過ぎぬ。

粟は疾くに刈入れたし、麥は蒔かずとも可、暖い土地の事、葱は霜に白根が長く、大根の雪に埋るゝ憂もない。羽目板の曲んだのも隙々に繕果てた、日が好ければ背戸の水仙の葉でも弄らうと云ふ爺様。

「豪え風でがanus喃。」

縁えんでももある事ことか、土間どまへ筵むしろを折敷をりしいて、べたん
と尻餅しりもちをついた形かたち、膝ひざまでの股引ももひき、千種色ちくさいろのを投出なげだ
しに、釣瓶つるべを跨またへ、踵かかとを空そらに引挟ひきはさみ、手細工てざいくで籬たがを
直なほして居あるのが、吹ふき荒すさぶ風かぜの中なかに、コト／＼／＼、
鳥とりが嘴くちばしを鳴ならすやうな。

と炬燵こたつから不性ぶしやうが氣きのない聲こゑで、

「雨あめになるだらうかね。」

「雪ゆきでがんしょ、何でも時候外じこうはつれの此この暖氣ぬくさぢ

や、吹返ふきかへしが潮手しほてになるべえ。」

コツトンと、才槌さいづちで釣瓶つるべの底そこなり也。

「なあ、旦那だんな。」

「あゝ、」

「お前様めえさま、こんな陽氣やうきに炬燵こたつ中なかさ突入つゝべえつてゝ、

雪ゆきが降ふつたら何どうするだね。」

「天窓あたまから引被ひつかぶるよ。」

首くびつ丈たけ潜もくりこ込んで、吹ふくならば吹ふけだが、風かぜは烈はげし
い。野山のやまを掛かけて土つちの波なみを煽あふるが如ごとく、時々とき／＼ぐら／
＼と障子しやうじが動うごく。が、南みなみで暖あたいから、恚かう引籠ひきこもる分ぶん

には、然して氣に成らず、随意よ、外れたら裏山の
椿の、岨に連々とある葉に搦んで燃ゆるばかりの早
咲を眺めよう、瀬戸の水仙の香も嗅がう、と仰向け
に、太平樂の巻物一卷、長々と手を擴げて居ると、
又一陣枕を揺つて、風は床下で躍上る。

「豪い風だね、」

今度は此方から聲を懸けて、

「曇りやしないかい。」

爺様、才槌の手を留めて、短い髯の、海綿を押し、
けた如き頤を上げ、背伸びをし、

「はあ、海の方の空へ、烏の羽のやうな雲が押被
さつて、風にはた／＼煽つてるだ。空半分は暗えだ
がね、根なし雲だで、今に吹飛んで了ふべえさ。」

はたと一つ手を拂いて、山を包んだ袋田の奥を透
して見て、

「山は晴ぢや

が、あゝ、あゝ、風が吹

いて吹暗ますで、大い牛が吼えるやうだ。おゝ、頂
邊の松の木さ角のやうに振廻す

「

と熟^{ぢつ}と見^み込^こんで、けたましく、
「やあ、旦那^{だんな}、見^みさつせい。」

「あれ、何うしたゞ。」

と爺様は、敷込んだ筵の端へづいと立つと、吹掛ける風を胸で應へて、

「危い、危い、あゝ、ぐる／＼廻る。やあ、山の根際へ打附つた。突ニめる。おつと、尻持をつくめえぞ。どつこい其處だ。えゝ、だらしはねえ、確乎さつせえ。」

腰を伸したり、屈めたり、脛を踏張つて夢中で喚く。

騒ぎが烈しいから、

「何だい、爺さん。」

「何だつて、」

と首を据ゑて、

「まあ、見さつせえ。」

「喧嘩か。」

「先づ喧嘩だ。喧嘩でがすがね、對手はねえだ

よ。

「

「對手なし？ 狂人かい。」

「はッはッ、對手はあるだが形がねえだよ。風と取組んで揉むでがす。あゝ、無理だ、無理だ。其の畦を突切るなあ。――横なぐれを啖つて堪るかい。――素人だ。それ見さつせえ、用水の落口だ。其の畦にや切れ目がある。むゝ、立停まつて思案するかな。」

「獨で天窓を掉動かすと、何處かへ丁齧の影がさす、猪首に窘めて、」

「引返さつせえよ。これさ、あゝ飛んだぞ。風の勢、身體が宙だ。八艘飛！ さて、轉んだ。それから謂はねえ事ぢやねえ。」

「どんな人だ。爺さん、村の者か。」

「何、洋服を着た男でがんさ。」

「銃獵家かね。」

「いんね、杖を持った若え人だが、突當りの出張りの、庚申塚で舞つてるだよ。岩さ突乗つた難船の

やうだ。

お剩まけに譯わけさ分わかんねえから、田たの畦くろを突つき切きつて、向むかうの山やまの裾すそへ出でようとするだね。海うみから正面まともに吹ふき付きつける奴やつあ、庚申塚かうしんづかへ打ぶ付つかつて、鍵かぎの手に挟あぐり込んで吹ふき溜たまるだに、其そ奴いつを、へえ、胸腹どうばらへ打ぶ付つけるだ、堪たまりごとあるもんかえー。あれ、見みさつせえ、丸まるくなつて窶すくんで了しまつた。後あとへも前さきへも動うごき得えねえ、何どうしるだあ。」

「何なにしろ、それや飛とんだ目めに逢あつた。少わい人ひとだつて、向むかう見みずな事ことをして、怪け我がでもしなけりや可いい。」

此この際さい炬燵こたつでもあるまい、と土間どまに有ありあはせの草履ざうりを突つ掛かけて面つらを出だすと、ばつと吹ふく。朝霜あさしもが此この暖だん氣きに解とけて、地ぢが濕しめつて居あるので、幸さいひ砂煙すなけぶりも立たなかつたが、何どうしたのか、何處どこにも其その人の姿すがたは見みえぬ。

爺様ぢいさまに聞きくと、土間どまへ下おりる間あひだだつた。畦あせの上に

居あ寤すまつて蹲しゃがんで居あた件くだんの男をとこは、逆とても向むかうまで抜ぬ切きれず、と斷あきら念らめたか、づゝと立たち、外ぐわ套いたうの裾すそを颯さつと翻かへして、取とつて返かへすと、前さき刻きに飛とび越こさうとして、一息いき猶ためら、躍をどりあが、上うへつて礫はたと苳かり田たの上うへへ寢ねた。其そのまゝむつくと起おきはしたが、くる／＼と廻まはるが疾はやいか、榛はんの木きの根ねを包つんだ稻いな束たばの蔭かげへ、今いま、倒たふれ込こんだ處ところと言いふ。

成程なるほど吹ふくわ　　ー　　砂煙すなけむりを捲まかないから、見みる目めには然さまでゞはないが、からつと霽はれた空そら蒼あをう、底そこに白味しろみを帯おびたのが、千切ちぎれ／＼に、水田みづたの淺あさい底そこに、倒さかき澄切すみきつた。海うみの上うへには、一刷ひとけ箕みの形かたちした黒雲くろくもが、此この袋田ふくろたの口くちを、遠とほく差さ覗のぞくが如ごとくに山やまを壓あつて輪取わとつて居あるが、最もう些ちつと廣ひろがつて、田たの上うへへかゝつたら、直すぐに其その水みづに染にじんで颯さつと流ながれて、一面めんに暗くらくなりさいうである。

又また其それだけに、際立きはだつて、袋田ふくろたの奥おくの山際やまぎはかけて、村むらの半なかばの朗ほがらかさ。眞書間まっびるまが透すき明とほつて、餘あまり明あかるさに月夜つきよのやう。

字の出口の右左に、根を据えた山の裾は、犇と兩方對合つて、こんな風の時、海の潮の瀧になつて押浸さうとするのを、防ぎ留めて居るやうで頼母しい。

又本街道は、其の出口を横に通る 西か

ら、東から、山の幕を切つて舞臺へ出る、馬、車、ぼつ／＼時々は自轉車、深張をさした婦人、郵便配達、或は脚黒く裳紅に、ちら／＼と過るのも、皆花道を横に切つて山の裾から裾へ入る。――態と土手を下りて、袋田を見舞ふのは殆ど無い。但暮方など、一際街道の人通、馬、車、往來の繁くなる中を、其の花道を貫いて海へ落ちる小川に架けた、近頃新しくなつた――小橋の袂で、ぐい、と轡を廻らして鼻頭を推向けて、村へ入るのも偶にはあるが、一月も居れば、執れ馴染の馬士衆。

茲に袋田と云つて、單に口が窄まつて底一つ中に、田、畑、藁屋、雜木山を装つたばかりのものではない。袋田の袋は、海に面したのと連つて、奥に又同

一形じかたちなのが一落らくをなして居る。――眞中まんなかを仕切しきつた處ところが、丁度ちやうど其そのの庚申塚かうしんづかで、村むらの形かたちは、恰あたかも連つらなつた小山こやまの間に、斜ななめに留とまつた大きな胡蝶てふ／＼に例たとへられる。

前まへと奥おくと、袋田ふくろたの兩翼りやうつばさ、庚申塚かうしんづかは蝶番てふつがひ。

其それも時ときにこそよれ、紫雲英げんげ、鼓草たんぼくが咲満さきみちて、菜なの花はなの粉こなが日中ひなかに霞かすむ頃ころ、麓ふもとに菽はぎの溢こぼるゝほど、夏なつの夜よは、月つきの青田あをたの羅着うすものきた胡蝶てふ／＼にも見みられよう。木きの葉は落ち、草枯くさかれて、瘦やせ山やまに岩いはの尖とがつた師走しはすの頃この日ころ、分わけて風かぜには、宛えんとして鳶とんひだこ風の破やぶれて田たに落おちた風情ふぜいがある。風いかのぼりの其骨そのほねばかり、物凄ものすこい蒼空あをぞらの下したに、ぶる／＼と震ふるへて、目めに遮さへきる霧きりの一重ひとへの紙かみもあらず。

と見みる／＼、捻切ねじきれるやうに、門島かどはたの葱ねぎが悚髮そくがみ立つて、青白あをしろい毛けを引ひき巻むしる、と同時どうじに、田たの水みづが彼方あつち此方こち礫つぶてのやうにばら／＼と逆立さかだち飛とぶ。岩蔭いはかげに干からびて残のこつた、眞赤まつかな蔦つたの葉はの翻ひるがへるのも、血ちの繁吹しぶきかと疑うたがはるゝ。

「そんなに僵たふれたり轉ころんだりぢや、怪我けがでもしや

あしないかな。」

と百年近い古屋根の、藁葺の重量を支へた、門の柱の些と曲んだのに手を掛けながら、伸上つて見遣るにさへ、不用意では押飛ばされさうに吹き頻る。

「何うだかね、石塊は少なし、田の土あ柔だで、然したる事もがんすめえが。」

爺様も氣になるさうで、小さく見ゆる稲束を差覗くやうにして、

「何しろ、あの蔭さ突潜つたまゝ、良暫時出て來ねえだ。」

「行つて見ようか。」

「可訝かんいべえ。是がはい、漁師町なら難船だで、直ぐに救助船漕出すだが、田畝で風を啖つたに、命綱を投げるでもあんめえさ。」

首ぐつたりで、畦道を行つたり來たりしとればとつて、是やい、性根着けるツて、突如天秤棒で撲しつける譯にや行かねえだ。此方ぢや、へい、的切狐

に魅つままれた、と睨にらんだ處ところで、荒神くわつじん様は前方むかうにも着ついてござる。

お前めえさま様も遣やらつしやるべえ。用ようもねえに、其それ何なんとか爲するとつて、其處そこ等をぶらり／＼と歩あり廻まはるだ。今時いまどきの若わえ人ひとだ。どんな料簡れうけんがあんべいとも計はかられねえ。大風おほかせに乗のつて泳およぐだね、風船ふうせん乗のりの下した稽古げいこかも分わかんねえで、虚氣うつかり素人しろうと料簡れうけんで、手てを附つけてはなりましたねえ。」

と呑氣のんきらしい事ことを眞面目まじめに云いふのも、しやがれて聞きゆるまで、びゆう／＼と風かぜが荒すさぶ。

「尤もつとも雨あめが交まじらないから大たいした難儀なんぎもしなからう。石瓦いしかはらが飛とぶ程ほどでもないから、怪我けがもすまいよ。が、あの吹曝ふきばくしぢや飛とび出だせないから、呼い吸きをついて居あるんだらう、何なにしろ人ひとつ子こ一人ひとり通とほらないね。」

「然されば、出端でつぱなに私わたしあ居あたけんど、何時いつ此この前まへを通とほつたか、つい氣きが付つかねえで居あたでがすよ。――

やあ、豪えらく吹ふくわ、何どうだね、まあ――

四

見るから風當りの分けて激い庚申塚は、木の根も
 暴露に、灰色の岩が岩破と缺けて、缺け目が鋭く刻々、
 立つて、向齒を切縛つた偉大なる白髑體が倒に食込
 んだ形に見える。草樹が翠の折からでも、白々と残
 つて、こんな風立つた日は言ふまでもなく、袋の口
 を習々と吹込む時さへ、其處へ絶えず颯々と當るの
 で、差す枝も振を替へ、草の花も面を背けて、木の
 葉の影も宿さぬけれども、岩が其の灰汁色である爲
 に、赫と當る日の光も薄曇つて　　尾花の靡く
 月夜などは、風筋を傳ひ／＼傳ひ、ぐる／＼と口を
 開けながら轉げ歩行く　　明星の光が浸んだ時
 なぞは、一目の鬼の、白銀の瞳が爛々として睨むに
 齊しい。

砂も苔も吹浚つて、岩は昨日今日削立ての、埃も
 据ゑず新しいが、延寶八年とした一基三尺ばかりの
 石碑が据つて、正面と左右に三體、庚申の猿が三足
 居る　　所謂袋田の庚申塚。

礎だいになつた岩いはの膚はだの、夢ゆめ見るやうな自然しぜんの段だんは、昔むかし人がぬかづいて、手てを支つき擦すらした痕あとであらう。向むかつた者ものを透すき見みをするか、と目めを押おへて一體ひとつ、通とほるものを熟じゆと見みて、嘲あざわら笑わらつて、吃くつと噴ふきだしさうな口くちをむずと壓おへて一體ひとつ、行ゆ過きざる者ものを、天あ窓まを抱かへて、見み送おくる如ごとく、兩りやうの耳みみを塞ふさいで一體ひとつ。――是これを刻きんだ小こ刀がたなは、雜ざつとしたものだけれども、三たい體さ宛ながら母親おふくろの胎はらの中なかで、もんどり打うつて躍をどるが如ごとく、石いしの上うへに浮うき出だした、其その浮うき彫ぼりの線せんばかりは、日ひにも月つきにも影かげを深ふかく、苔こけさへ蒸むして、變へん化げの産うぶ毛げのやうに見みえる。

土地とちの者ものは、前ぜん記き延えん寶ぼうの海つな嘯なみが、村むらの奥おくまで押おし込こんだ、當たう時じ死ひと人じにのあつた供く養やうと、向かう後ごの高たか潮しほを禁ま厭なふために、件くだんの塚つかを築ついたと言いふ。然さもあるべし。いづれ何い時つかは、海うみの潮しほか、浮うき世よの波なみか、袋ふくろ田だへ浸しみ入いることがなくては濟すむまい。――地ちの理りを思おもふに、恰あたも襲おはむとする波なみのために、天てんの設なせる、緩ゆる慢やかな、稻いな妻づま形がたの塹ざん壕がうに似にた村むらであるから。

村人むらびとの心こころにか、田たの上うへへか、潮うしほが被かつて、世よが變かは

り、畦を一つ／＼星が移つて、袋田の袋の灣となる
時こそ、光を放つか、虹を吐くか、庚申塚は奇蹟と
なり、名所となり、然も、航海の船を覆す難所とな
るに違ひない。

此の塚は、疊屋の隠居所から、ものゝ小半町隔た
つて居るが、風が山を押し揺る所爲か、透通つて蒼白
い風の中に、浮上つて、一段と間近に見ゆる。

が、不思議や。

「フツ、堪らぬ風だ。」

と目を塞ぎ、

「ヤ騒々しい、」

で耳を壓へ、

「埃だ。」

と云つて目を擦るやうである。――風は削る
が如く、石碑の面を打挫いで、吹き減らすばかり激
いので、巖の膚が粉になるか、と村の片翼の空へ掛
けて、朦朧として灰色の柱が擴がる。

其處で風に巻かれたゝめ、向うの山の根へ切れよ
うとして、途中で稲束の蔭へかくれたさうな、少い
人は未だ出ない。

「爺さん、」

面をぱつと吹拂はれつゝ、急込んで言ひかけた。

「何だね。」

「然ういへば、何は、どうしたらう。今朝あの庚
申塚の前に倒れて居たと云ふ 何よ、それ、

「おう、奥の吉松が許の別嬪かね。」

五

今や庚申塚を見たに就いて、不圖其の事を聞出したが、話の機会が出来たゞけで、思出すほど過去つた事ではない。一體、此の日の明方は、海に面した邊より、袋田は一方口、一際朝靄が深かつた。

靄は晴際が大事とか。一齊に赫と上るともに、此の南風になつたので、其までは、野山が呼吸を凝らしたやうに、平時よりも寂然として、雀の聲も籠つたのである。

明方些と過ぎた頃、其の靄の中を、町方の親類へ、煤拂の手傳ひに、早出をして、奥の方から生欠伸の呼吸を、丸く鼻の先へ漾はせながら、頬被りが出て来た。角と言ふお百姓が、庚申塚に差懸ると、路を塞いで、横に寝たものゝ姿があつた。

野良犬かと思ふと、否、褌をこぼれた紅で、婦人だと直ぐに知れた。

是は、と鬢の香を聞くばかり、近々と鼻を寄せて、
熟と見ると、癩を惱んだやうに鳩尾を壓した、白や
かな右手を、搦んで前髪がこぼれかゝる額に當てゝ、
猿が碑の前に突俯した。が、取亂した形で、襟がに
つて、青い半襟が、美しい襟脚を抜いて、背筋の曲
つた肩が外れて、襦袢の色もほんのりと、酔つた風
情に靄が掛り、淺黄の麻の葉と黒縹子を打合はせの
帯引かけに結んだのが、細りした腰を落ちて、横状
に地に敷いて居た。

俯突せの顔は、見ないでも直ぐに分る。

「やあ、吉松どんの姉はん、姉はんぢやねえか。

えゝ！ こりや何うだ。」

とひよいと退いて、きよとんと成つたが、一目散
に取つて返した。

「お早う！ 大變だ。」

と三町、一呼吸、聲をはずませ、吉松が門へ喚込
むと、大戸は未だ閉つて、取附きの縁が開き。春を
待つため頃日貼替へた新しい障子に、爐に焚く櫛の

影が透いたが、其處からは答へないで、

「こりやお早え。」

と横手の廐の前で受けた。是は御注進が（大變）

だと言ふ。婦が家の吉松で、働盛りの若い者。律義で然も稼人、早や草鞋穿きの身拵へ、町方へ賣りに出る焚附の荷を着けようと、馬を曳出して居た處。

「來せい、來せい、疾く來せえ。こんの姉はん

が、

庚申塚に倒れて居らあ！

「呀？ おらあ又、朝飯前に例の柴刈かと思つ

た。

と葱の色より蒼くなつて、驚いたわ、魂消たぞ、と直ぐに飛んで出る角の跡へ、追續くと、引出して綱を解いた艶の住い黒馬が、ぶる／＼と鬣を振つたが、ふゝんと地を嗅いで、大きくのそ／＼、手綱を前脚の間へ長く、づらりと伸ばして、吉松の後を打つ。

「轉ぶなよ、確乎、」

と振返つて、突のめらうとする吉松を呼んだ時、
角は馬の其の黒い顔が、縦條に靄を破つて、道中へ
出たのを見たが、兎角う言ふ暇はなかつた。

雖然、馬は心あつて飼主の力に成つたらしい。

頓て二人で驅着けると、爾時は最う石の上に取り
かけて、顔は上げた、が重さうに頭を垂れて、兩手
を石碑の前に支いて、帯も袖も、未だ崩折れた纖弱
い姿。

縋り寄つて、物を言つても、一言には頷き、一言
には頭を掉るのみ、恍惚と、直ぐにも目を塞ぎさう
に見えるから、疾く内へ、と傍から角も勵すので、
手を取つて肩にしても、膝が、がつくりと摺落ちる。
「角さん、大目に見てくらつせえ。」
ときよと／＼しながら、吉松は其の若い美しいの
を背に負はうとしたさうである。

婦をんなは吉松きちまつの肩かたへ、兩袖りやうそでが捲まいて、其その上うへへ肱ひぢを載のせて、前髪まへがみを伏ふせて背負おぶつた。腰こしを抱だいて歩あ行るかうとすると、わい。「わあい。」と囃はやして、げら／＼と唇くちびるの厚あつい音おんの、然しかも薄うすつぺらな聲こゑを出だしたものがあゝる。――二人ふたりの小女こめらう郎ー。八十やそに瀧たきと云いふ妹いもつとどもで、背せ中なかの婦をんなには何なん千びき疋おにの鬼あにに當あたる、評ひやう判ばんの惡あくたれ阿あ魔ま、事ことこそあれ、と朝飯あさめしの味あつ噌け什わんの椀わんを引ひ被かつて來きたらしい、路みちを塞ふさいで、笑わらひつけて、兄あにじや者がはつ、と氣きを打うつて逡巡たじろぐ處ところを、
 「可笑をかしいなあ、」
 「朝あさつから、わあい、」
 と行やつた。

馬うまが心こころあつて、飼主かひぬしの手助てたすけに來きたらうと言いふのは此處こゝで。

吉松きちまつは山やまの根ねへ、手てを放はなした婦をんなを、角かくが介かい添そへして、馬うまの背せに搔かき乗のりせた。

「鯨よ、頼むよ。」

と言つて、婦がともすれば鞍をはづす、力なげな足を、角と兩方から押へて持ち、馬の兩傍に引添つて、手綱は元の通り、づるりと下げて、漸とのこで内へ運ぶと門の戸は開いて居たが、馬は縁側へ横づけに、周章て、頓痴たものと見える、吉松が土足の草鞋で、縁の上へ、ひよこりと上ると、爐ばたの暗い中に目を白うして居た姑が、生命に別條とでも憂慮ふ事か。

「馬鹿野郎！」

と怒鳴りつけた。

吃驚敗亡、這下りる吉松より、婦の方が、其時は最う確で、馬の背で裳を揃へて、すつと反身に縁へ下りたが、つか／＼しと爐の周圍、姑の背後を通る。

又是に、角が呆氣に取られる中、婦はつか／＼と納戸へ入つて、嫁入りの一荷長持の前に、胸を切め、肩を抱いて、身をしめて坐つてしまつた。さあ、サシツレの差出口、寄つて集つて評議區々。

漸と口を開かした婦に聞く、と何にも知らぬ、夢
を見たやうだ、とばかり。

詰りは、激しく寝惚けた事になる。が、其なり納
まるか何うかは分らぬ。――何時までも見て居ら
れぬ。――煤拂の手傳ひ。角は置放しの馬を厩へ
引込んで、

「われえ、好くしたぞ。」

と吉に成かはつて、其の鼻頭を撫でながら、

「姉はんは身體が弱えだ。大事にさつせえ。晩げ
え、又見舞ふだよ。」

で、町へ出しなに、――此家の前を通つて、土
間に立つた爺様を見掛けると、十歩ばかりも葱畑を
引込んだ處を、わざ／＼入つて来て、先を急ぐと言
ふ下から、

「まあ、聞かつせえ、それから何だ。」

と馬に饒舌つた挨拶までして聞かせて、

「爺様は、まあ、何と思はつしやる。」

ふん、と幾度も打傾いたが、「夜さり、はあ、

裸で手水に出たんべい。
と言ふ。

「何故だえ。」

「何故でもよ、まあ、行つて來せえ、私らも後で見舞ふべい、又晩に逢ふだ。」

「そんなら、晩げえ。」
と分れて出た。

早起きをした爲に、此の話を傍聞きしたは可いが、委しい事を――尋ねるより、實は炬燵に入つて、不性行者は、茫乎其となく婦の身を打案じつゝ居たのである。

此の機會に言出すと、爺様は思出したか、
「其事だつけ。おゝ、丁度可え。吉松が姉さまを見舞がてら、今の少い人の様子を見べい。何、こんな風に。私等あ足から村に生拔だ。」
と才槌を腰にさすと、腕組して、ぬつと廂をはづれた。凧の後姿、豆殻に似たる哉。

「おゝ怪我をなすつたな。」

見ると額に血が染んだ。――此の人は、萬平爺
 様が、庚申塚の前で、風にぐら／＼となる體を固め
 て、及腰に畦の稻束の蔭を見込んだ時、猛然とした
 體で、飛んで舊の道へ翻然と出て、塚の前で、又ば
 つと吹立てられた、外套の裾を空ざまに絞つた、と
 思ふと、爺様と擦れ／＼に二人纏れて淀んで立つ
 中、颯と兩方へ吹立てられて、爺はひよる／＼と向
 うへ行く。此は後歩みに風に乗つて、漸つと塚の前
 を離れる、と立直つて、隱居家の前の一條路を揉む、
 足が擦れて、靴の尖がふは／＼軽い。少時して葱畠
 の前を通つて二歩ばかり出るや否や、哄と挟つて弓
 形に煽りつけた向風に吹戻されて蹣跚と成つたが、
 頭突きに奮發んで、胸を重壓に曳と堪へた、満身の
 力餘つて、身を支へた杖が内反に、撓んで弱とした
 と思ふと中ほどからぱつきり折れる、ト其の拍子に、
 鐙を前下りに壓へて居た手が外れて、薄色の中折帽
 が、ふツと空ざまに舞上つて、忽ち手あつて叩きつ
 けたやうに、地を擦つて、づる／＼と葱畑を飛んで

来たが、間近に轉がつて、うまく不行者の手に拾はれた。

主　　は蒼白い顔をして、眉を顰めて見返つたまゝ、半ば手に残つた杖をブーン、水田の上へ投り出して、確乎と腕を抱き、風を突抜くが如く行かうとするので、もし／＼、と其の中折帽を手にしながら呼留めて、此方から持つて出ようとしたので、引返したが物も言はず　　否、聲も出なかつたらう　　打附かるばかりに一禮して受取らうとするのを、渡さずに　　先づ休まれよ、遠慮はない、と帽を持つたまゝ、さつ／＼と引込むと、見るから疲れ果てた少い紳士は、渡りに舟の面色で、一議に及ばず　　藁屋の下へ潜つて入つて、筵に躓いて、づか／＼と上を踏んで、失禮、とはじめて口を利いたが、聲が掠れて小さかつた。

其處で、　　どつかり、框の端へ腰を落した、瞳も定まらず、頻に四邊を二したのである。

炬燵で散かつた處より、却つて此處の方が、と思

つて、行者は寛いで爐の向うへ坐つたが、づぶ濡れ
になつた如く、見るも傷ましい額に血潮！
躍り寄つて差覗いて尋ねたのであつた。
と自暴に横ざまに引擦つたが、取つて見ると、掌
には然うもなく、中指の腹に朱が染る。

「掠疵です。否、否、些とも痛くも何ともないで
す。」

と直ぐに衣兜へ手を突込む。未だ氣も落着かない
と見え、手端が震へて、思ふやうに成らなかつた。

肩を揺つて、

「あゝ、何うも、しかし驚きました。
つく／＼言つて、落膽する。」

「風向きの所爲と見えます。恚うして居ては然ほ
どもありませんが、一步出ますと當てますよ。些
と落着いていらつしやい。何しろお上りなさいませ
んか。さあ、何うぞ、」
と茶釜の下を不器用に搔廻しながら勧めると、些
とも遠慮はしなかつた。

「お邪魔をします。」

と黄色いほど埃を浴びた、靴を氣味悪さうに踏脱いで、

「飛んだ厄介です。」

「其まゝ、」

と外套を脱がさないで、

「臺なし埃で。唯今敷物を上げます。」

「敷物なんぞ、幾度尻餅を支いたか分らんですもの。まるで手玉に取られたんだ――堪りやしません。難有う、」

と言つたが、品ある男の、（此の難有う）と軽く言ふのが、如何にも鷹揚のやうに聞えた。――打解けた體で、

「御免なさい。」

と縞の筒服を、お平に、と言つた勧めに従ふ。

「難有う、漸と人心地になりました。實は何うし
ようかと思つたんです。」

又四邊をニして、戸障子があり、爐を控へ、行者
が差向つた背後には、衣服の色も映りさうな拭込
だ大戸棚の、天井を支へて光るのも、風を遮る鐵の
楯、世にも嬉しげな顔したが、瞳の色が安らかでな
い。

茶釜の胴を撫で試み、

「大したお怪我でも無いやうです。最うそんなに
血も出ませんな。」

「唯今御注意があつたんで、然う言へば些とひり
／＼するやうだと思ひます位です。自分ぢや氣が着
きませんでしたよ。」

「飛んだ御難儀をなさいましたね。」

「思ひも懸けません。是が親のためか、友達のた
めに山越でもすると言ふんなら、張合もあります。」

其もです、家でも倒すほどの暴風で、もあれば知らず。極りが悪い、まるで人間の鋸屑ですな。此邊等の海濱ぢや、此節は三日置ぐらゐにや吹く風ですもの。――馬鹿々々しい、散々です。」

すると、今日ばかり来た人ではなからう。

「矢張此の地方にお住居で、」

「何です 其の、」

と一寸考へたらしかつた

「海濱に、眞個の眞似事のやうな別荘がありました、其處へ多日來て居るんです。―― 貴下、此

家が、」

と、此時はじめて不行者の状を正視した。

「部屋借でございます。」

と袂をかさ／＼と遣つて、巻蓆の、些とひしやげた袋を出して、背屈みに吸ひつけたが、いや、我ながら此の體は、餘り風采の好いものでなかつた。

「最う學校はお休みですか。」

扱は准教員と思つたらしい。何うでも構はぬ。

「最う休みです。」

「今日は、ぢや、お一人、お留守居で。」

「否、享年六十七歳になります爺様と二人對向ひで、御覽の通り行ひ澄まして居りますが、貴下、其處でお見懸けなさりやしませんか。奥の方へ、ひよこノ、爺様の參つたのを、」

「はあ、」

と些と上の空　　其癖、土間越に其方を見遣つて、空に爐の上へ翳した手の先が又戦く。

「あの、庚申塚の處で、」

「　　だ然うです　　猿の形は見て

居たですが、何の塚だか氣にも留めないで居ました

つけ　　昨夜、」

と言ひかけて不圖口をつぐんだ、ト顔を見合はせたので、寂しく笑つて、

「逢ひました、逢ひました。」

と聲を強めて續けざまに言つた。

「然うでせう、」

と何うでも可いやうな返事をしたが、實は、今
（昨夜）で切つて、口籠つて、顔の色の變つたの
が、尠からず氣に成つて、つい釣込まれて虚氣した
ので。

故とらしいが、何だか元氣づいたらしい態で、

「其です、其のために漸と腰が立つたんです。

風は何も、此處ばかりと云ふんぢやない、宅を出ま
す時から吹いて居ました。

街道から折曲つて、此の村へ入りまして、別段

急に強くなつたと言ふんぢやありません。背後から

吹くんですから、前へ／＼と押出されるやうで、却

つてすた／＼歩行いて、こりや愉快だと思ひまし

た。

「と此處で又一口切つた。」

「私は散歩に来たんです。」

と分けて言つたが、今の（昨夜）を確に耳に
した身を取つては、何か仔細あつて、殊更に――

でなくても可い、言譯をしたかの如くに聞えたのである。

然あらぬ體で、

「御散歩は、此處へは最初なんでしょうか。」

「否、幾度も

と云ふんでもありません。

一寸々々、ですから方角の分らない土地ぢやない、
今落着きますと、何を、馬鹿な周章たんか、自分に
も可訝いんですが。

あの曲角まで行きますとね、突然哄と吹煽つて、
引包んで、庚申塚の岩疊へ身體ごと撲着けさうなん
です。

引呼吸に成ると、腰が浮いて打倒れさうで、目も
眩むやうぢやありませんか。

二三度ぐる／＼廻りました。

漸との事で、塚の前を前途へ一足抜けたんですが
ね、風は愈々強くなるし、こりや散歩處ぢやない。
疾く歸らうと思つたですが、何だか、塚で渦を巻い
てるやうで、今のを思出したんで、路を變へようと、
それから、畦道を突切らうとした。酷い目に逢つた
んです。足許が狭く、兩方が田で、吹倒されさうで、

身體を横にして、傳つて行くと、ふら／＼する、非常な勢で、足を掬つて倒すんです。

弱つたのは、溝が一つありました。足を擴げりや何でレもない、一跨ぎツかないんですが、危いから飛んだです。

他愛もなく、膝を折つて土下座しました。

向うを見ると、

と居ながら、背後へ指をさして、

「向うの山の裾は、路が續いてるやうで、然うぢやありませんね。見た處は傾斜面の畠になつて、わざ／＼苳込んだ大きな刺のやうな樹の株がばら／＼あります。其を踏切つた處で、山の腹をなぞへに一つ傳はらないと、向う側の路へは出んです。不可ませんよ。どうして、溝一つ飛兼ねるやうな風に、そんな峠の上の路なんざ傳へるものぢやありません。

詮方が無いから、引返さうとすると、最う氣が苛つて、詰らん、何のために、馬鹿な、こんな難儀をする！ 早く氣を弛めて休みたいと思つたんで、焦

つたから又失敗りました。

今度はね、」

と言つきも稍物馴れて、

「可厭と言ふほど田の上へ飛ばされました。見事に投倒されました。何をする、と對手でもあるやうに。惜くつて。」

と言ふ、眦がキリと動いた。まだ氣は平かにならぬと見える、何か、ものに激して居るやう。

「驚きますな。」

と此方は和げるやうに微笑んだ。

「驚きませう、
と苦笑して、」

「で、何です、躍上つたです、尚ほ悪かつた。

苛々して、魂が丁と据らんかつたと見えて、又突
轉ぶんです。

落膽して、はあ、と其處の稲束に筆りついて、や

つと一呼吸吐きました。が、さあ、些と心が静まると、
何故か急に心細くなつて来た。

風は酷いにして、恚うした晴天。――然も暖い。
勿論、私は絞るやうな汗びつしより。それなのに、
畦にも樹の蔭にも、人ツ子一人、影も見えなからう
ぢやありませんか。

遠くに唯此のお宅の門と、間を置いて、隣の藁葺
の屋根が見えるんです。――奥へ行けば、八九軒
農家のあるのを知つて居ますが、何にしる餘り寂寞
だ。

来る時にも此の村へ入つてから、どんな人にも出
撞さなかつた。――何か、此の風は、袋田には特
別の業風で、土地つ子は、其を知つて門邊へも出ん
のぢやないか。

然うかも知れない。處ぢやない。臆病神
に誘はれて居たんですから、確に然うだ、と極めて
了つて、情なくなつて、荒海に漂つて浮木の切に絶

つた氣きがする。思切おもひきつて、聲こゑを揚あげて、人ひとでも呼よば
うかと思おもつたんです。

狂人きちがひの沙汰さたですな。」

と又また寂さびしく笑わらつて、

「お内うちのですか、
、老人らうじんの姿すがたを見みまし
た。地獄ぢごくで佛ほとけつて此この事ことだと思おもつたんです。

あゝやつて村むらの者ものが歩あるくものを、と始はじめて夢ゆめが
覚さめたやうに元氣げんきづいた。其その勢いきほで塚つかの前まへを乗切のりきつ
たんです。――が、杖ステッキの挫折ひしをれたのに又また挫くじけて、
此この前さき何どうならうか、と思おもひましたよ。御深切ごしんせつで助たす
かつた、眞個ほんとうです。難有ありがたう、」

と一呼吸ひといきに言いつたが、強しひて口數くちかずを多おほく、勤つとめて
快活くわいくわつに饒舌しゃべつたらしい。

何故なら、顔色が陰鬱で、聲に力がない。張つた調子が時々弛んだ。何うも風に吹かれたばかりで、恚うまで屈托する法はあるまい。僻目かは知らぬが、前刻（昨夜）と言つたのを、追掛けて尋ねられまいため、故と立續けて紛らさうと勤めたのであらう。

聞いて見たくないではないが、人の秘事、強ひるに當らぬ。

其と無しに、

「それでは、此家の爺様も、深切が通つたのです。貴下が悩んでお在なざるのを、甚く案じて居ました。つけ、お知己でも無いのに、此方からお呼懸け申すも變だ。次手ながら御様子も見ようと言つて出掛けました。

其が通るのを御覽なすつて、元氣付いたと仰有るんです。何でも老人の爲る事は率がありませんな。

本人今に歸つたら、嘸本懷で喜びませう。御緩りな
さつて下さい。

些と横にでもお成んなすつたら何うです。こん
な田舎屋、些とも御遠慮は入りません。」

「え、御厄介次手に、最う些とお邪魔をさして頂
きませう。今のに懲りて、外へ出る氣はしないで
よ。考へると可恐いほどです。」

一寸目を塞いで、俯向いたが、

「庚申塚ですね、」
急に改まられたので、

「はあ、」
と居直る。

「彼處は何ですか。何か、あの塚に就いて、此邊
の傳説でもありますでせうか。」

妙な事を聞くと思つた。

「別に私も聞きません。――尤も信仰があつ

立てたのでせいうし、老人などは通りがりにお
辭儀をします。尾籠なお話ですが、あの桶ですね、
肥料の――彼を貴下、引擔いで彼處の前を通る
時、皆が皆でもありませんが、へい、御免なせえま
し、と聲を懸けるのがあります。」

噱笑ふだらう、と思ふと、案外、謹聴の状して頷
く。

聊か圖に乗り、

「はゝはゝ、扨て、改つて挨拶をする事になりま
すと、眞正面のなんざ、

や、臭いわ、――ツて、鼻を壓へた體ですね。
串戯ですが。しかし見やうに因つて何うにも取れま
す。其の時、其の人たちの心々で。

此家の爺様なんざ、能く然う言ひました、而して
信じて疑ひませんが、誰か酔つばらつて彼處を通つ
て、蹠跟かゝつて、手で正面の猿の顔を撫でると、
噓をしたさうですよ、口を塞いだのが大きな聲で。

又夜中に、大變な唄を歌つて通ると、行過ぎたのを、

背後うしろから、「騒さわしい、」とやつた。是これがあ、
左手ひだりてに耳みみを塞ふさいで居ゐるんです。

つい近頃ちかごろ、御存じごぞんの曲角まがりかどの田たへ向むかつて、突立つゝたつて
ー 眞日中まひなか ー 怪けしからん小用こようを達たさうと
して、廢よせば可いいに、ひよい、と見みると、右手みぎての猿さる
が、一寸手ちよいとてをはづして目めを出だした、あつと腰こしを抜ぬく
と、一寸ちよいと、又目まためを隠かくした。其その疾はやい事こと 瞬また
きする間ま。

で、石いしに刻きざんだ小刀目こがたなめの、あの頬邊ほつべたを膨ふくらまして、
ぷつと笑わらつたやうだつた、と言いつて震ふるへたさうです。

何なんでも、御約束おやくそくの、見みまい、聞きくまい、言いふまい
は、人間にんげんの目めに宿やどつた、ほんの其時そのときだけの像すがた。人ひとの
知らない時ときは、潤くわつと睨にらみ、あんぐりと開あき、兎うのや
うに動うごかしてござるのだつて爺様ぢいさまなんざ極きめて居ゐま
す、 妙めうでせう。」

と笑わらつて言いふと、又思またおもひもよらず、眞面目まじめな顔かほし
て、

「然うですか。」

と打傾き、然も謙つた風采で、

「貴下は、其を、何うお考へですか。」

不行者は面啖つた。

「え、」

「何いうお考へなさいます？」

何か傳説は無いかと言ふ尋ねに付いて、澁茶ばかりの

響應、風情のなさ。せめてものお伽のつもりで、

ありのまゝに應へたが、切更つて、然も慇懃に聞か

れては、内の爺様や、今朝來た角を對手なら知らぬ

こと、風采恁の如き紳士に對して、然ん候は覺束な

い。

「否、そんな事より、此の奥の俗にナダレと言ひます、松山の岨の小松に留まつた、白い人形の愛神の矢が、此の風の勢で何處かへ吹飛ぶのを待つて居ます。一層の事流矢でも可いから、内の屋の棟へ刺さるなんざ、願うてもないのですが、」

と話を外らして、

「唐突にこんな事を申して、貴下、御覽になりましたか何うですか、赤土山の小松の中に、汽車の窓からも見えますよ。海近ですから、鷗が群れるやうでもあるし、長閑な日なんざ、刷で霞を描いたやうです。」

「知つて居ます、ヴィナスの女神の像も建つて居ます。」

「何でも西洋人の持手に成つて、其が彼處を飾つたとか言つて、うつかり人を近づけませんから、下から見では委しい事は分りませんが、成程——」

舶來の天人ですな。然うかと思ふと、五重塔のやうなもの、釣鐘の伏つた處、何うやら二三體羅漢らしいものもあります。

私なんぞ、素人料簡ぢや、樹林のまゝで飾りつけて、鳥の聲をあしらつて、まだ家を建てない處が趣向と見えます。中空に髣髴と極樂園を現して、廳て別荘を築上げようと言ふ腹らしい。

何にしる、中にも高い松の枝へ、あの羽の生えたのを留まらせて、下界を望んで、矢を番へた處が嬉しいんです。

それに、名さへ袋田と云ふ村のどん底へ、白蠟製の龍宮のやうに糶上つたんですもの、村の者なんぞ、あの矢が放れたら危かんべいなんて言つて、評議區々なんだから面白うございますよ。」

「不思議がつて居りませう。」
「人身御供以來の矢ですから。」

これで、一寸話が途絶えた。戸外の吹頻るのは却つて耳馴れたが、戸障子ががた／＼鳴つて、棟がギイギイと軋むので、夜のやうな天井を仰ぐと、自分言出した事ながら、愛神が其の翼を羽叩き、弓弦が且鳴るやうに思ひ遣られる。爾時恍惚となつて、

「花火の中から出たやうに、あの色々の像が、風に舞上つたら何うでせう。」

「私なんざ眞先に此の村を遁出しますね。」

「えゝ、何故ですか。」

「海嘯か、大地震の前兆でせう。——老人に聞きました。昔奥州三厩の海嘯の時は、七日ばかり前から、空中を煙のやうな色々の姿が飛んで、中には烏帽子素抱を着たのがあり、白い馬に乗られたのも見えたと言ひます。」

「おもしろい事を言ひますね。」

とはじめて心から微笑んだやうだった。膝を寄せ

て、

「何ですか、此村に多日在らしつて、變つた話は

ありませんか。」

「今のナグレの女神像？」

「はあ、はあ、」

「庚申塚の噓。」

「成程。」

「貴下がお来でなすつた事なんざ、村に取つては變つた事の一つでせう。」

「否、私なんぞ、他に」

「然うですね。」

「何かありませんか、どんな事か。」

と、恚う胸の底がむず痒さうに、玉の釦を動かして聞きたがる。

「然うですね、別に」

「最近に、何か——」

「昨夜ですか、」

不意に言つたが、これは出来た。

「え、」

と少からず、動ずる處を、

「何、昨夜ぢやありませんが、今朝庚申塚の前

に、
と言ひも終らず、土間の筵が、虎の皮のやうに翻
然と躍つて、なぐれに吹込んだ風が染みたか、外套
の裾が戦いた。

「やあ、爺さんか。最う些と歸宅が遅いと、閉出しを食はせる處だつた。時々甚く吹込むから。」
「爐の手前から伸上つて、紳士の肩越に聲を懸けた。」

「えゝ、閉めますべい、隠居屋だ。朝つからでも、はあ、構えごとねえだで。」
「と疾く珍客を見て取つて、愛想ぶりに、がた／＼と大戸を閉めると、一齊に暗くなつて、影法師が這つて蹠り上る。」

「爺さん、前刻の御方だ。大層何だよ、お前さんの志を喜んでお在だよ。」
「御しんせつに。又お邪魔を、と慇懃に言ふ。」

「ひやあ、何ういたしやして。茶も、碌に湧いて居なかつたでがanseうの。えら、不調法でがans。お前様ね。」

「割坐で鼎の一脚、背ぐくまつて、頤を小さく一つ

振つたが、隙間から射す日の光に、澁を塗つた顔色で、

「直に行つて、ちよつくら歸るべいと思ひましけ、然う行かねえだよ
吉松が許さ、思つたよ

り混雑が大えでね、」

「吉松」

慌しげに言を挟んだので、爺様と一所に兩方から熟と瞻ると、少い客は狼狽へた調子で、

「吉松ツて

許へ行つたんですか。」

「へい、お民さんてえ、姉はんが、怪體な目に逢ひましての。今日の明方、何ですが。庚申塚の前に倒れて、ぐつたり柔に成つとるで、馬に載せて歸つたと言ひましけえ、其を、はあ、見舞はうとつて行つたでがんすよ。」

「騒ぎが大いつて何うしたよ。姐さんはどつと寝たか。」

「いんね、お前様、どつとでも、そつとでも、寝るやうだと、未だ始末が可えがね、憑物がして

「と腰を擡げた、兩提げの粉煙草を横ちよで捻つて、
「私あ、何でも憑物がしたと思ふがす。そんで
はい、氣が荒立つてね、轟乎立つて駈出すだ
駈出すは可えが、井戸さ突入らうと
爲るでねえかね。」

「まあ、何うしたんだい。」

「其がね、憑物が爲せるでがすよ。尤もはい、評
定區々でがんす。中にも可恐しく寐惚けたんべい、
と言ふ者もあるだね。私等が行つた時に、近所鄰家
聞傳へて、どや／＼見舞に來をつたげ、孰も知つた
顔が爐縁にづらりと輪になつた。」

門口も人集りぢや。良くねえ餓鬼等、可い事にし
て、吉が妹の小女郎ども 二人とも學校を
休みくさつた。内に居りや親どもに我鳴られるが、
蝦茶袴穿いたなりで、木戸前見物に口上を陳べてけ
つかる。否さ、旦那方の前だがね。

私わつちを見ると、お前様めえさま、疊屋たぐみの爺様ぢいさまア　――　言いふ
けえ、おら、八十坊やそぼうか、お瀧たきよ　――　嫂あねはんが何なん
だつてな、鹽梅あんべえは何どうだ、と聞きけば、庚申かうしん様の罰ばちが
當あたつて、夜よさり天道干てんだうぼしになつたあよ　――　何なんと
聞き辛つひかんべいがね。

嫂あねさんは、何なんでがさ、今朝けさ角かくが來きて言いつた通とほり、
長持ながもちの前に、可哀かはいげな、前髪まへがみぶら下さげて俯向うつむいて坐すわ
つとる。

看病かんびやうやら、お檢しらべやら、婆等ばあどもは納戸なんどに取卷とりまいて詰つめ
懸かけた。吉松きちまつは此方人等こちとらと同じ爐邊ろばたにきよる／＼し
て、私わつちを見みても分わからねえだね、突つんのめつて、お辭儀じぎ
ばかりぢや。

何なにか、氣きの毒どくでの、更あらたまつて見舞みまひも、はい言いへまし
ねえ。

ぱくり／＼煙草たばこ喫くんで様子やうすを見みつけが、疊屋たぐみの、
お前等めえらは何なんと思おもふ、と新屋しんやのが小聲ここゑで言いつけね。

私が串戯半分に、はあ、無え事ではねえ。一寸ら
魔物に誘はれたんべい。平時も然う云ふんだけんど
も、總別此の田舎家の外後架は、あれは良くねえ。
藏立てる身上で、家の内へ拵えねえは何う云ふもん
だ。分けても少い婦人などが、夜夜中野雪隠へ出る
は間違えの原だよ。お剩に、何だ、此處等ぢや寒の
中も裸で寝べいが、お民さんも昨夜、へい、帯めね
えで外へ出たらう。障子を開けて寝てせえが、可恐
い夢を見る、其の所爲で、魘されたつぺい。何でも
ねえ事、悪い夢を見こじれたど、よくあるこんだ、
と取做す氣で、言つたどがね、私あ、はあ悪い事を
言つけえよ。」

爺様ぢいさまは一寸句切ちよつとくぎつて、じろ／＼と二人ふたりを見るみ。白しろい眉毛まゆげを押被おつかぶせて、伏目ふしめに成なつて、掌てのひらでポンと拂はたき、しめやかな煙けむりを吹ふいて、

「私わつちあ、へい、大でえ聲こゑでも言いはなんだに、次つぎの納なん戸どに、お民坊たみぼうを取詰とつめて、膝ひざさ乗懸のりかるやうにして、猫背ねこぜで頤あごを突出つきだして居ゐつけえよ　――　吉松きちまつが阿母おつかあ

姑あいばでがす、

と紳士しんしを見返みかへり、

「耳みみを押立おつたて、聞付きけたが、鎌首かまくびを持上もちあげて、
「あ、疊屋たぐみやの、ござらつせえ。餘所行よそゆが無なければ
とつて、裸はだかで寝ねるやうな此家こゝの姉ねえやぢやござんない。見みさつしやいまし、丁ちやんと肌はだのもの着きて居ゐるだ。」
とお前様めえさま、あの、脂やにだらけの、瞼まぶたの白しろく引轉覆ひつくりかへつた、
しよぼ／＼した赤目あかめを、嫁よめに擦付着こすりつけて、じろり行やつた。

お民たみさんは身みをしめたが、婆ばあめ、悪わるいものを見みつ

けたゞね。えゝ、「やあ、此の燃えるやうな色氣は何うぢやい、主やこれ此の襦袢は、祝言の晩に着て來さしつて、葛籠に藏つた切のものをぢや、一張羅を大事がつて、鎮守様のお祭祀にも着たことがねえに。フン、フン、魔が魅したの、化されたのと言うて、皆の衆の目を眩ますだ。主の方が、狐ぢやの。皆の衆、これ、吃と規法を立てゝくらつしやい。夢も、夢ぢや、誰ぞ色男の夢を見て、夜中に駈落をしたに極まつた。はれもやれも可恐しい。足留の呪詛もせんが、神佛の御罰が當つて、磔の釘に刺されたぢやろ。五逆罪ぢや。」と何が早や、聞取法聞の利口交りに捲立てると、姉はんは、何と、顔を赧うしたでねえか。

見て居られましねえ。お婆々、然う一概に言はつしやんな。寐魔れて鬼になり、夢中で屋根を歩行く話もあるわ。どんな事で、着物を着替へめえもんでもねえ。お民さんもお民さんぢやが、まあ、此方も氣を鎮めさしやいよ、と誰だか一人、其の膝を掴み立てる婆々の手を放さうとすると、「駈落の對手は己様か。さあ、對手を吐かせ、」と其のまんま

お民さんの鬚を引搦んだ。」

「おゝ、おゝ、」
と紳士は思はず聲を出した。

「痛々しげに眉を顰めて、仰向けに
喉が白い。」
咽

「存じません。」
ツた切、緊乎と口を切るだ。

「其は悪い、言譯さつせえ、」

「（そんな口を利かつしやると、親類の端くれ、
此方人等も黙つては居られねえ。」
と男どもが突
懸るだね。」

「さあ、御亭主、第一主が黙つて居る法はあるめ
えが。」
と爐端でも突き始める。や、早や、黒雲
蔽ひ重るだ。」

こりや、何うなるべい、と私等も手を束ねて、唾
を呑んで居たでがす。

すると、はあ、魂消たつてば、聞かつせえまし。
吉松が這出して、爐邊から納戸へ橋に懸つて、うじ
／＼しつけ、矢鱈棒這面の汗さ撫廻はかいて、言
ふのを聞くと、――其が、何と、お前様、吉松が
爲た仕事だつてば、呆れもしねえ。」

「何だ、吉松が連出したのか。内が辛い、二人で
何處かへ遁げようとつて。」
意外であつた。

爺様は、雁首コツゝリ。
「處が然うでねえだてね。私もはい、愈々解せね
え事になつたが、何うして夜中に内を出て、庚申塚
で倒れて居たか、そりや吉松にも分らねえ、第一本
人が夢中と言ふ。」

が、其のお前様、襦袢の緋の一件だよ。

何と、町方や、海岸さ、邸方の奥様だ、別荘の嬢
様が、紅え裙をひら／＼さして歩行かつしやるで、
吉の奴あ、へい、」

と小鼻を撫上げ、

「それが羨しくてなんねえで、何時の間にか、葛籠の底から掴み出して、密と隠して居たもんだね。汝が懷中で温めて持つて居て、豆洋燈を消さねえ前に、内證で着て見せてくれつて、納戸の隅で頼んだてえばの。

男どもは堪へかねて、皆一齊に笑ひ出した。はッはッはッ。」

「處ところが、はい、笑わらひ事ことぢやがあしねえ。」 哄どつと笑わらふと、吉松きちまつは眞赤まっかになつた。――と見みる内うちに、お民たみさんは蒼あをく成なると、長持ながもちの暗くらい上うへへ、すつと細ほつそりした縞しまの着物きものの肩かたが立たつたと思おもはつせえ。ついで、納戸なんどの横縁よこえんから背戸せとへ飛とぶ、此この風かぜだ、ばつと煽あふつて、大波おほなみに乗のつかるやうさね。ぐるりと、あのナダレの下したの、小川をがはのふちの柳やなぎの樹きを廻まはつげが、目高めだか、小鮒こぶなでねえ事ことにや飛込とびこめねえ水みづだもんだで、横手よこてへすた／＼切きれると、わあと云いふ間に、井戸端いどばたへばつたり膝ひざあ折をつた。

石畳いしだぐみの縁ふちへ掴つかまつて、背中せなかあ波打なみうたして又立またたたうとする處ところを、一人ひとり、背後うしろから、えゝ、と抱だいた。抱だいたけんど、いや危あぶえだよ。勢いきほひで打附ぶつかつた發奮はつみに然さうして井戸端いどばたで打坐ぶつずわつたゞが、はあ、一思ひとおもひで、逆さかさまに飛込とびこむ處ところよ。

抱だいた奴やつは抱だいた奴やつ、最もう一人ひとりは、下水溜げすゐたまりへ踏込ふみこんだで、ばつちやり鼠色ねずみいろの水みづさ煙けむりを吹ふいて風かぜに舞まふ

だに、其まゝ手を擴げて、躍る體で、短氣、短氣
―― とばつかし喚く。

「これ、まあ、飛んでもねえ、」と、抱いた奴
が背後へ素引くと、

「放してツ」ツてお前様、ぶるツと肩を振つた
つけ、一生懸命豪え力だ。」

と爺様我的折れた面をして、

「ぐら／＼と成つて、あの長え眞黒な髪が、ざら
りと懸ると頸筋へ搦んで、へい、生首さ宙を飛ぶや
うに揺ぶれる。」

其の勢で、振放して、今度は、はい、縁側へ腰を
掛けて、せい／＼呼吸ばかり吐いて居つけ、吉松の
前を筋違に戸外へ駈出さうとすると、小女郎はじめ
其處に溜つて、呆氣に取られて居た徒が、ひやあ、
と我鳴る。

と氣の毒よ、壓へても引いても揉み立てる、婦の

褻つまが　ー　此この風かぜに堪たまらんでの、お民たみさんは辛つらか
つたか、たぢ／＼と吹戻ふきもとされて、厩うまやの中なかへ遁にげ込んだ
わ。

衆みんな揺動どや々々／＼、押寄おしよせたるがの、馬うまの奴やつあヒイ、
ンと嘶いばえ上あがつて、長面ながづらあ振廻ふりまはす、がた／＼と横木よこぎを
蹴ける。

怪我けがを爲させるな言いふと、こんな時ときは重寶ちゆうほうよ。直すぐ
に一人鬣ひとしたてがみを擦すつて飛込とびこんで、隅すみツ子こさ壓おさへる、と横よこ
へ抜ぬける、前まへへ廻まはりや、背後うしろへ蹲しゃがむ　ー

『厭いや、厭いや、厭いやですよ。』　つてお民たみさんは遁にげ
廻まはるだ、右みぎを追おや、左ひだりへ喃なり、旦那だんな。

婆様ばあさまが、べた／＼と草履ざうりで出でて來きた。での、三途づが
川はが指圖さしづと成なると見みた目めが惨むごい。尻尾しつぽで拂はらふ、四脚よつあし
をじたばた荒あはれる。秣まぐさがばら／＼、濕しめッぽい暗くれえ中なか
を、お民たみさんが半狂亂はんきやうらん、裾すそをめら／＼と炎ほのほが絡からむだ、
牛頭馬頭ごづめづに追おはれる形かたちぢや。

臆^{やが}て吉松^{きちまつ}が潜^{もぐりこ}込んで、ふツノ云^いつけ、馬^{うま}の鼻息^{はないき}の下^{した}で、漸^やと、お民^{たみ}さんを掴^{つか}へた。最^もう
はあ、理^りも非^ひも辨^{わきめ}えねえ。死^しにてえだか、活^いきてえ
だか、唯^{たゞ}恚^{いか}うなつちや、大勢^{おほぜい}の前^{まへ}で押^{おっ}掴^{つか}まつたのが
惜^{くや}げぢやつた。「實^{さと}家^とに對^{たい}しても生命^{いのち}は大切^{だいじ}、然^さ
う手足^{てあし}を悶^{もて}えさしては怪^け我^がするで、縛^{しば}らつしやい」
と婆殿^{ばあどの}が指圖^{さしづ}でござる。

亭主^{ていしゆ}の吉松^{きちまつ}も考^{かんが}へたが、こりや成程^{なるほど}、と合點^{がってん}した
か、馬^{うま}の手綱^{たづな}引^ひかなぐつて、何^どうやら手^てだけ引縛^{ひつくる}め
たがの。

小女^{こあま}の餓鬼^{がき}め、さつノと出^でしやばつて、馬^{うま}の口^{くち}
をはづしたよ。どつこいしよ、と手傳^{てつた}ひの男^{をとこ}がお民^{たみ}
さんを引抱^{ひんだ}いた。

『殺^{ころ}して、殺^{ころ}して、』ツて身^みを揉^もみながら、帶^{おび}
も袂^{たもと}もするノと、廐^{うまや}から仰^{あをむ}向けに、宙^{ちゆう}を煽^{あふ}られて
出^でて來^きたが、風^{かぜ}の勢^{いきほひ}に其^その重荷^{おもに}ぢやで、抱^だいた奴^{やつ}あ、
ひよろノとなつて、縁側^{えんがは}へどさりと尻^{しり}を支^ついた。

「婆様よ、何うしべい。」

「其まんま、納戸へ寝かさつしやい、今に御祈禱でもして貰ふべいさ。」

と其處でへい、仰向けに、打倒して、天窓から蒲團を被せつけえよ。

「甚い恥掻きな狂人ぢや、へい、見る物ぢやござらない、最うお見舞にも及びましねえ。」

憎まれ口イ利きやあがる。

「枕をさせさつしやい、逆上たづら、尚ほ血が上つて悪かんべい、」と私あ一式の事に喚いての、一先づ、歸つて来たゞがね。婆奴等は、今に始まつた事ではねえが、お民さんの様子も、へい、合點がいかねえだ。緋縮緬さ脛に突嵌めた事は解せたが、前後の鹽梅が何うも些と取逆氣て居るやうだね、私が目にも、何うもはい、

と腕を組んで一人で頷き、
「何しろ、魅込まれたに違えはねえだ、村には美しさが過ぎたもんだで。」

「何でも甚太く寐魔れて、夜中庚申塚くんだりま
で、地から三尺高え處を、何か目に見えねえものゝ
手に引張れた　と、まあ思はねえぢやなり
ましねえね。」

そんで、其の塚の前で、明方まで打轉げて、氣さ
遠くなつてる處を、馬の背へ乗せられて、内へ連れ
て歸られると、わい／＼と寄つて集る。

これぢや、へい、誰が茫とならずに濟まう。酒に
酔つて正體が失くなつて、ひよいと、目い覺める、
馬の上では、私だつて引轉覆るだ。

其處へ、其の小恥かしい、紅え襦袢の一件だで、
いや、泣くより笑ひ、氣の毒な中にも腹筋でがんす。
野郎どのが懷中に持つて居て、お民さんを頼んだ圖
が思はれるでねえかね。發頭人は男でも、婦人は受
身ぢや、満座の中で赫となつて、氣が狂つたに違え
ねえだよ。

豫て病身の處へ、お前様、息も精も續くことか、
連枷で粟を拂くつても、優しい男が對手でねえ、婆殿
が肌脱ぎで、五十年來鍛へた腕ぢや、小休みもせず
に、びしりと行る。堪つたもんけえ。鍛冶屋の小僧
でも向槌ぢや音を上げるだに、あの又挟團扇で、小
糠をばた／＼と煽ぐたつても、旦那方の前ですが
ね、左の手で使ふやうな見た目の樂なもんでねえ
だよ。

植附けた、田の草取だ、それ、風が吹く、麥が溢
れる、雨が降る、稻穂が落ちると、びしよ濡れに成
つたり、空風に吹かれたりよ、塹へ鶏を追込むたつ
て、十羽上では一仕事だね。

合間小間にや洗濯だ、張物だ、繕ひだ。聞かつせ
えまし、如何な事ても、姉はんが始めて、三十年目
の始の夜具を裏返をさせられたと云ひます。

で、其に又、小姑めが大概のいけずかい。まだ／＼
に面倒なは、最一人の弟だね。此奴が名代の極
道で、兄哥が羊なら狼ぢや。血氣盛で飢ゑた奴が、

あの美しい嫂と一ツに住んで、村中の嫌はれ者、相手が無えだけに始末が悪い。お剩に絲工場の職工だよ。

が、方便なもんだてね。此奴夜明の三時に起きて、役所へ通つて、夜も遅くでねえと歸らねえだで、些とは息が吐けるけんども、其代りにや、退場を待つて熱い茶を沸して置く。夜中の二時にや、最う起きて、飯を焚く、辨當拵へ、これが不殘嫂の手汐ぢや。年に一度も寝忘れて、出掛けに冷飯でも食はしますかい、茶漬をがと口に含んで、其處等へ飯粒の霧を吹くだね。

此頃は夜業があるで、時々は工場廻りの安宿へ泊るさうな。昨夜も今朝も居なかつたてよ。あの騒ぎに、居合はせて、奴が廐へ追込んだとして見さつせえ、あの眞白な嫂の腕さ、引捻つて、生血を出さずにや濟まなかんべい。

可恐しい。

そんな、こんなに氣い使つて、心が弱つて、體の

疲れて居る處ぢや。魔も魅すづらあ、上氣せねえで
よー

さあ、取逆氣た、と成つて見ると、醫者の手ぢや
駄目なこんだて、酷く、はい、募らねえ内に、瀧へ
浸けるが可かんべい とー

「瀧へ、」
と言ふ、紳士の聲は急込んだ。
「瀧、瀧、瀧とは。」

「御坊の瀧ー」此の山奥に、へい、寺があつ
ての、其の岨を落ちてるだから。人間界離れた處、
唯さへ氣が寂と靜まるでね、其の一軒屋の御坊へ宿
を取つて、巖を削つた石段から抱下しては、病人を
瀧壺へ浸すだよ。

澤山は來ましねえが、そんなでも、はい、夏向は二
組三組、御坊を宿に取つて、養生に來て居るたが、
邊鄙で食べるものも何も無えから、稗の飯に味噌汁
ばかり。自然と其の、附添ひのものまで精進に成つ

て、御利益があるでがす。

けれども、はい、暴れる奴を引縛つて、瀧に押浸すだで、天窓から劍だね。私も遠い縁類の看病に頼まれて、一頃行きつけ。夜中には尚ほ利くちゆつて、裸身にして高い崖を引き下ろすだ。きやつと言ふと、瀧が颯と懸つて、眞蒼なお月様に絡んだ處は、八寒地獄劍の山だで、や、一日で逃げて來たよ。思ひ出しても悚然とするだあ。」

「が、そりや夏に限るだらう。此の寒空に、まさか、お前、」

「否、お前様、逆せ上つた當人にや、火も水も分ちはねえだで、吝な婆々だ、衣服さ引剥いで、あのまんま胴縛りにして浴びせせいよ。あゝ、其を思ふと、堪んねえだね。」

「爺さん、」
と、客は屹となつた。

百姓家ひやくしやうか

「實に飛だ我儘を言つて、爺さんを酒買ひに出して遣つて、貴下を差置いて、怪しからん出過ぎた事を――無禮な奴だ、とお思ひでせう。」

其に、爺さんだつて、内の隠居です。一家の老人を小使ひに使ふ、私今、濟まんが酒を買つて来て下さらんかつて言つた時、老人に妙な顔をされたには、冷汗を流したです。と尚ほ其の額を拭ふのであつた。」

「御心配には及びません。失禮ですが、何か内々で私に御話でもありさうにお見受け申しましたか

ら。」

「あゝ、目顔で知らせて下すつた、知つて居ま

す。」

「爺様も何うか其の心を得て出て行つた様子です、

御遠慮はありません。」

と言ふ内も、頻に心の急く風で、今金を渡して、
其のまゝ膝の上に摺つたなり口の開いて居る紙入の
中の、挟んだ物から、見得もなく名札を取つて出し
て、慌しく又押込んだ。

此の時知つた名は言はぬ。が、伯爵家の世嗣の君
—— 何う云ふ因縁だつたか、奥の袋田の其の吉
松の背後の山一貫占めて、不思議な女神像愛神なぞ
を、すく／＼と据置いたのは此の伯爵家だ、と一頃
甲乙に言傳へたのが、つい頃日になつて、否、違つ
た、何其と言ふ西洋人だ、と漸と分つた
其の家の、此が世嗣である。

此の日の様子は、争はれぬは品格ばかり。容子も
風采も散々で、関ヶ原の戦ひ敗れた浮田中納言秀家
卿、野武士の宿に潜んだ姿、雨に悩んだ人ならねど
も、衰參らせたき風情である。

此の時、血が颯と顔に出た、額の疵が燃えるやう
に殷紅の色を呈したが、

「何うぞ、何うぞ
ま私を縛つて下さい、」

願ひます、此のまん

「縛つて、而して、引立て、吉松ン許へ連れて行つて、あの、お民の繩を解いて下さい。一生のお願いです。歎願します。」

と太く激した状で、思はず、じりりと寄つて来る。此方はどつかりと腰を落して、

「まあ、氣をお鎮めなさいまし、解りました。仔細がおあんなさるんでせう。が、貴方は最う先刻から何うかしてお在なさる。不躑ですが、氣が上ずつてお在なさいます。」

でなくつて、幾干猛烈に吹けばつても、此の位な風に、貴下、躓いたり、轉んだりなるつて事はありません。

御覽なさい、怪我さへして居るぢやありませんか。

始めから然う思ひましたが、まるで顔の色なんざ御病人だ。今にも倒れてゞもお了ひなさりさうな御様子です。其に太く疲勞していらつしやるやうだから、貯があれば、茶のかりに一杯も清涼劑に差上げたい、と思ひましたが、御覽の通りの體裁で、其も生憎。

ですから、差出たやうでしたけれども、爺さんには、葡萄酒の良いのをつて、然う言つて遣つたんですよ。今に歸りませう。他に聞くものがあつてお可厭なら、何うにも成ります。酒でも飲つて確乎なさい。

「と鐵火箸をぐつと灰にさして、一體何うなすつたと言ふんです。」

「は、」

と一呼吸に落膽して、

「お茶を一口、」

「召飲れ、」

ぐつと干して、

「あゝ、今になつて動悸の甚いのが分ります。」

と胸むねを撫なでようとすゝる、其手そのても据すわらず、押おしこすべ
て、膝ひざを掴つかんで、

「お民たみは、そんな目めに逢あつて、何どうして居ゐませ
う。」

此方は故と事もなげに、

「大丈夫、親類も附いて居れば、人目もあります。

如何に邪険だつて、打ちも撲きもしはしますまい。

其に、貴下は然う仰有る——どんな事情だか知

りませんが、狂氣扱ひにしたのは、勿怪の僥倖ぢや

ありませんか。」

と宥めるやうに云つたけれども、其も、よくは耳

にも入らぬ様子で、

「瀧へ、其の瀧へなんぞ連れて行かれちや大變で

す。」

と寒さうな身震する。

「今や直ぐツて事があるものですか。又いざとな

れば、お民さん當人も、事實狂人でないことを證據

立つて見せませうから。」

「しかし、しかし、聞いたやうな様子ぢや、單に

扱はれるばかりぢや濟まないで、眞個に氣が違ふか

も分らんですよ。ねえ、何うか縛つて引立てゝ、私

を彼處へ連れて行つて下さい。」

「飛でもない事を、引立てるのツて、はゝは、」
と何がなしに笑つて見せて、

「串戯にしました處で、行がりの事は兎も角、
今、貴下が、其の亂脈の中へ顔をお出しなすつちや、
第一御身分に、」

と皆聞かないで、これは又潔く薩張としたもの言ひだつた。

「否、身分なんか、身分、もしあれば名譽だつて、
家だつて構やしないツて、あの婦にも言つたんです。
私だつて、實際決心して爲た事です。勿論、近頃父
が亡くなつて、家でも何でも、私の自由になるやう
になつたんですから。――私馬鹿ですから、學
校も碌に出来ず 此の海岸の別荘へ怠けに
來ちや、網なんか打つて歩行く、と其處等の漁師等
が、通掛りに畚の中を覗いて、ニや鰯の滿と漁れた
のを見ちや――殿様は御前だが、若様は漁師だ
――つて笑ひました。其の通りです、眞個なん
です。」

「まかりちが罷違へばれふし漁師になるき氣で、あのをんな婦をつれだ連出したんで
す。」

「ことば言葉はしどろで、とりと取留めは無なかつたが、そ其のだい一大
じ事はよ能くきこ聞える。」

「つれだお連出しにな成つた、」

「うつつむとさすがに俯向く。」

「さくぢ昨夜！」

「じつ實は」

さて扱こそ（さくぢ昨夜）のい意はこれ是である。――

「おもまあ、ど何うしてね、」

「おもと思はずへた隔てもなくなつて、こなた此方もまがほ眞顔にすりよ摺寄つ
た。」

「しよ一緒にばしち馬車に乗つてある歩行かうと言つて、」

「やくそくお約束ができ出来て、」

「え、」

「ぢや、豫てあの婦とはお知己で
尤も
お知己でなくつては、こんな事にも成りますまい
が。」

「知己
知己つて言や知己ですが、何も
前方で知己と言ふんぢやない
私の方で、無理に知己にしてしまったんです。

ですから、昨夜の事なんぞも、決して婦から進んで出たんぢやありません。爲せたんです、強ひたんです。強請つて、無理に誘ひ出したんです。

ね、ぢや、お民に罪はないぢやありませんか。其を婦ばかり縛らせて置く法はない、助けて下さい。私が皆背負つてるんです。――婦に過失はありません。」

「お待ちなさいよ。然うして家出をした上は、罪が無ければ無し、あればあるで、何ち道、貴下ばかりの過失と言ふんぢやありません。」

貴下にも罪があれば、無論婦にもあるんです。婦に罪が無いのなら、貴下にもそりや無い。

何しろ、緩りお話をなすつて下さい。お心置きなく、可うございますかね。」

と熱心に言つて、頷かせて、

「而して、一緒にお連れ出しなすつたのが、可訝いぢやありませんか。お民さんは今朝明方靄の中に、一人で庚申塚に倒れて居たと言ふんですよ。」

すると、何う云ふ事になつたんでせう。」

手の汗を拭ひながら、押揉んで居た手巾を、はたと落して、

「あゝ、茫として私にも分らないで居ました。慥うです、まあ、聞いて下さい。」

「最初、此の袋田の事を知つて、遊びに来ましたのは、去年の夏で、其時は朋友と三人連れ。」

打明けてお話しするのに、恥も外聞もありませんから申しませう。遊びに来たつて言へば、唯散歩にでも參つたやうで穩ですがね、其の實は、奥へあの美人を見に来ました。

私より前に朋友が見つけたんです。――何でも私の別荘の庭へ、草取りに雇はれて来た時に見たんださうで、恐らく此の邊ぢや見懸けないと言ふ。

例の誇張したらうが、何も損はない。行つて見る、行つて見る、處は知つてるかつて聞くと、其の後、千菜物の籠を背負つて、町の八百屋へ賣りに来た處を、晩方見つけて、林檎を買ひながら、其の八百屋で家を聞いて、お目が留まりましたか、へゞゞ、とか何とか言はれたさうで、丁と詮索は行届いて居る――出掛ける、構ふ事はない、とづか／＼此の

別世界のやうな、袋田へ侵入に及びました。

岨に山百合だの、野藤だのが咲いて居ました、そんなものは構はん。

今度の事ぢや、お話の中心點にでもしなけりやならないやうな、あの庚申塚ですな。其さへ有つたんだか無かつたんだか、點で氣にも留めないで、のそ／＼其處等をのさばり散らして。

唯暑い時だつたゞけに、奥の方から流れて出る、先刻私が悩みましたね、あの小流が、今のやうに水が枯れては居なくつて、露草の暗い中を、さら／＼流れて、處々白くなつて、蒼い花の上を越して、澄切つて走るのが、可い心持だつたんです。

裾と裾を、山の下を操り抜けるやうに、づん／＼奥へ、塹壕だ、塹壕だ、天、彼の美人をして堅壘ならしむるぞ、なぞと憚からず冴えながら、空のかつと開いた大な洞穴へ入るやうな此の袋田を、頓て麓で包んだ底へ着いたと思ふ處で、右を見ると、四角

いやうな百姓家があつて、大な柳の樹が一本、鬱然茂つて、藁屋の棟を包むやうにして居たのが、何だか奥床しくつて、美しくつて、然も一寸意氣ツてんですか、私たちにや其の、粹な、當世なやうに見えました。

誰の目にも心持は同一だと見えて、其の後聞くと、可哀相な事があります。お民は、元來身體が弱い、力業は出来ないから、暮しは何うでも、居職か、勤人――百姓家は逆も遣り切れないと、實家でも云つたのに、媒の人が、百姓だつて、土穿りを爲るぢやない、田畠は作男に任せ切。

内ぢや別荘の出入をして、旦那方と膝組みで暮すと言ふ――お民も縁談のある家は、どんな様子だらう、と實家の妹を連れて、密と、遠くから今の吉松の家を覗くと、其の柳が蕭々々と、優しく涼しく茂つてるのを見て、あゝ、是なら、と安心をしたつて一言へいひます。

毛桃けもや、柿かき、李すもの植うつて居ゐるのより、其その柳やなぎの方ほうが、何なんだか妙めうに、住すんでる者ものも心意こころい氣きが美うつくしく見みえませうー

楓けやけの大木たいぼくは庄屋しやうやの門かど、柳やなぎの古樹ふるきは里さとのお茶屋ちやの軒のきに枝し垂だれる、と何なんとなく思おもはれますもの。

如何いかにも、小作こなくに百姓しやうしやうさして、大分たいぶ小綺麗こぎれいに住すんでるやうに思おもはれて、それで縁かたづ付けく氣きになつたんですつて。

淺薄あさはかな と云いふ私達わたしたちが矢張やつぱり、其その柳やなぎを見みた時ときは、床ゆかしい氣きがしたんです。尤もつとも其その柳やなぎの樹きの目印めじるしにして來きたので、豫かねて此これが其その美人びじんの家いへだと思おもつて、其それがために懷なつかしかつたかも知しれませんが。

其その、月明つきあかりに瀧たきを見みるやうな、涼すずしい緑みどりの靡なびいた中なかに、白鷺はくでも留とまつた風ふうに、一先刻いっせんこくくてさつきもお話はなしの、上うへの岨がけの、あの女神像によしんざうが、霞かすみもかゝらずー ちら／＼見みえます。

居るぞ、と一人低聲で云ふ。私は門口から覗きま
したが、藁屋の下は薄暗いので能く分らん、とうま
い事を考へた　ー

「御免よ、裏の、あの雪見たいな人形を見させて
くれ」つて。たかゞ邸に草雀りに来る對手だ、遠
慮はしません。傍若無人に、土竈を築いた土間を、
三人で、向うの背戸へ突抜けたんです　ー　其の
柳のある許へ。」

「お聞きの通り、貴下、其の亂暴さ加減ですから、外に誰が居たか、そんな事は些とも氣に留まつちや居りません。」

『どうぞお掛けなさいまして、ひどい處でござい
ます。』と言つて、背戸の縁へ、豎にして、埃を
拂いて、持つて來て、莫座を敷いてくれたのは其の
美人。

『さあ、掛けたまへ、構やしない、』と連出し
た奴が、案内者だけに心得た顔で世話をする。

腰を掛けて、可いな、實に美麗なもんだなんて、
其の柳を見透かして、岨の女神の像を高慢に仰ぎな
がらふざけたんですが、氣が付く、と向いこの爐端
で、薄汚い婆さんが、茶碗を仰向けて並べたから、
『歸らう、』と私が一番に飛出した。

昔あつたと言ふ、毛見の悪役人か、検査係と言ふ

横暴な風で、どや／＼と三人、土間の竈の前を又通つて、舊の門口へ出る、とでした。

跣足で、其で襷で、恚う、

と、カウスをぐいとかゝげつゝ、

「此處等まで――こんなぢや不可い、」

と獨言のやうに半ばを言つて、手首を握つて、

「細いが、肉の可い、すきりとした腕を出して、

何か筵に干したものを取込んで居る處でした。

「おや、お歸りでございますか、」と、姉さん

かぶりの手拭を外して、ちやんと挨拶をしましたつ

け。

はつ、と言つて一人、あわをくつた體でお辭儀をした。此の男なんざ、餘り美しいので、思はず敬意を表したんだ、と言ひます
途中での話で

すが。

五歩ばかりで、何となく振り返ると、其時、いま取つた藍染の手拭を口に嚙へて、俯向いて、ぐい、と

腕を揚げて、被ぐやうに襟脚を撫でゝ居る。藁屋越に柳が纏れて、夕暮の風が戦ぐ、水の音も聞えました。實際美しかつたんですね。

處を、古風な、一人、突然、ドシンと私の背中を撲つた。婦が見たらうと思ふから、極が悪くつて駈出しましたよ。

美人だ！ が、あの、繕はず、飾らず、見得もなし、跣足もあゝなると形而上のふ風情がある。靴を穿いた女神の像と言ふのは少い。處で、何となく憂を帯びて、些と陰氣な、其も品に成りはするが、物寂い所は少い孀だ。其で、貞操 孝 行、一村の賞者な奴が、盆踊の時、代官に惚れられるか、鷹狩の殿様に見染められて、權威と、壓制で、奪取られて、一悲劇が出来ようと言ふ人相だ。人相が然うだよ。さあ、其時に及んで、家のために身を殺すか、其ともお部屋となつて夫を殺すか。何方にしろ生命がけの婦人だ、あの様子が、と案内した奴の、花を飾るのを聞きながら、私は妙に愉快でしに而して得意になつて、身内を煽られるやうな心持が

したんです。

何だか、自分華族であるのが嬉しかった、と言ふものは――其の美人に對して、鷹狩の殿様とは行かないでも、何うやら、代官ぐらゐな事は出來さうに思はれたからです。

同時に、殿様や代官と言へば、惚れた婦なら、嬬だらうが何だらうが、敢て引奪くつて差支へない、と思つた。」

と言ひかけて、猶豫ひながら、

「 思ひました。不埒な！ 昔、領主や代官が他の美人を奪ふとする、と仁者とも賢君とも言はれない。惡逆とは言ふ、無道とは言ふ。けれども、私通とも何とも言はん。婦、娘、妾を奪つたところでは言へ、野合だなんぞと言ひはしない。構はず、奪はう。筵旗で押寄せたつて、たかゞ袋田の村一つ。金の力で踏潰すに暇が要るか！ 己が家は伯爵だ、と高を括つた。」

「惡逆無道、そんな事は書にある字だ。又聖人や君子なんて時世後れな者に成りたくも何とも無い。構はず引奪る。――引奪つて、萬一揆のために代官滅亡と成つた處で、昔暴君が國家を失つたも同一事、假に是を天下に傳ふる歴史家があるとすれば、殺生關白美人を奪ふ、とに、遣る歟。少くとも、新聞の三面記事に、愚劣な標題を掲げられるやうなんぢやない、遣つ了へ！」

と恚うだつたんです。が、そんな横着な料簡で居る癖に、人間と云ふものは、考へて見ると、根が是でも何處か正直かも知れません。別のことぢやないんです。――其の後二三度、今度から、は私一人で、のそ／＼彼家の前へ行つたんですが、妙に氣が咎める、ばかりぢやなく、何の爲に胡亂つくんか、我ながら極が悪くつて揀つたいが、正直と云ふのは此處なんです。

吉松の裏山には、其の女神像、愛神がありません。

繪工が、寫さして貰ひたい、彫刻師が、見せて欲しいと言つた處で、對手が對手、色鉛筆でも嘗めて居れば其で事が濟んだでせうのに、此の御覽の通り殺風景で、美しいと言や顔の好い婦ばかり、繪葉書も人形も念頭に無いのですから、仔細のない、其の。口實も發見せませんでした。

しかし、うまいものが見つかりました。煤だらけの軒前でも、成丈日當を選つて掛けて置く、鳥籠の、其も古び切つた、鼠の穴を一ヶ所、燐寸の空箱のひしやげたので塞いだんですが、頬白鳥が一羽。

知里里、古呂呂呂、知里古呂と、佳い諸鈴で囀つて居ますから、

「おい、頬白鳥を見せておくれ、」と、是をだしに使ひましたよ。

「頬白鳥を見に来たぜ、」つて又出掛ける。

「若様はお好きですか。」と口を利くやうになりました。

此の「若様」と、言はれたんで、又ぐつと豪
くなつた。最う自棄に悪代官なんぞを標榜しやしま
せん。づつと其の鷹狩の殿様になりましたよ。

「水をおくれ、」なぞと、對手を小間使どころ
に扱ふ。が、貴下、可厭な顔もせんでせう、――
而して、

「水は不可ませんですから、お湯を、」と言ふ、
其が實は嬉しくつて、

と未だ風に押附けられた、掠のとれぬ咳をして、
ハンケチで口を拭いたが、伏目に、

「其の類白鳥が種になつて話も出来て、別に手持
不沙汰な事もなかつたんです。聞きます處、こりや
去年寒明に、此の近邊十何年にもない雪が降つて、
八寸ばかり積つた時、吉松の弟と云ふのが、厩の裏
の竹藪の前の雪を搔いて、ばら／＼米を撒いた、も
ちはごを刺して、夜の明けない内から厩へ入つて、
羽目を覗きながら狙つて居て、餌に餓えて来る小鳥
を、小雀、山雀、鶉、可哀相に藪鶯さへ一羽交つて、

十五六羽、頬白鳥ばかりも三羽取つた、其の一羽を、
拜むやうにして頼んで、お民が籠に養つたんださう
です。勿論息はあつたが、もちを外す時に無理をさ
れたか、片羽痛めて居て、飛び得なかつたからだ、
と言ひます。

二年越、飼つてあるから能く馴れて居る、と言つ
て、黍を白歯にくゝんで出すと、籠の目から嘴で、
赤い唇をつゝいて取る。――カチリと言つた。
と端ない、舌を見られたらうと思つたのでせう、
興に乗つて遣つたらしかつたが、はツと顔を赧くし
て、
「

と言ひ漉つて、苦笑した。

「私は、そんな勇氣は無かつたんです。尤も彼方
此方人が居ました。大方婆々どもなんでせう、そん
な者は、壁の雨染、障子の破目同然で、眼中になか
つたけれども、何うして父が存生だつたんですから、
家が自分のぢやない。投出さうたつて然うは行かん
かつたんですが、
父は、何です、其の夏
の末に亡くなりました。――

お^{はなし}話^{つゞ}の^な續^{つゞ}き^なで^なす^なが^な、
呂^ろッ^ろて^ろ鳴^なき^なま^なし^なた^なよ^な。
「 類^ほ白^じ鳥^ろが^ろ、
知^ち里^り里^ろ里^ろ里^ろ里^ろ、
古^こ呂^ろ

「一日

世嗣の君は更めて言った。

「今日こそは、と又此の袋田へ入つて来ました。午少し過ぎで、時間の見計らひ、別に注意をしたでもなくつて、二人の妹どもが、未だ小學校から歸らないと言ふことが、なんとなく胸にあつた。

この、お宅の前を、半町ほど街道へ寄つた畑に、婆々が一人、何だか青菜を間引いて居たのが、熟は見ませんでした。何うやら吉松の阿母のやうで、其ぢやあ、と思つたが、吉松は何處にも見えません。尤も、其處等に彼方此方、唯今天から降つて来た、と云ふ風で、三人、二人、畑打をして居ましたつけ。畝々、山の裾を傳はつて、蔭へ入つたり、日向へ出たり、狭い處ぢや構はず粟を干した筈の上を蹈んで、通る、と最う其節ぢや用水の小流が、白々に成つて、水が底を摺つて、枯草の中を、かさ／＼云ふやうに、裂けた銀紙のやうに見えました。

其の音が、身體へ響いて、骨を削るやうで、づゝと、あの廐の裏の藪を潜つて、お民の背戸の柳の下を流れて来るんだ、と思ふと、キリ／＼と、扱帯か何かで、胸を緊めつけられる思。

妙に、草臥れたやうで、其の癖、氣が焦つて、恚うふら／＼するから、曲り角の、あの庚申塚の巖疊の上へ、ぐツたりと恚つて休んだんですね。ー今日の此の風が、彼處へ固つて吹着けると同一に、其日は又別して屏風のやうな岩の窪に、赫と日が當つて居つたんです。

三ツ四ツ、直ぐ傍に、俵ぐらゐな稲束が眞白に轉がつてる。些と横向きになると、直ぐ目の前に崖を上る絲のやうな路があります。ーあれから頂を高く越すと、西洋人の持山だとか言ふ、例の女神像の突立つた、吉松の裏へは鴨越になるんですつて。ーこんな路は、世を忍ぶ日蔭者が夢にとぼ／＼と通ふんだ。己は、そんなぢやない、華族だ、と靴をトン／＼とやつて、抱いてた杖を振つた。

其そのの杖ステッキの輪わに亂みだれて、一面めんの赤蜻蛉あかとんぼが、光ひかります、
と言いひたさうにヒラ／＼遣やるのが、山やまを越こして、愛キユビ
神ツトの矢やが、羽はねを切きつて來きたやうで、莞爾にっこりすると、面おも
白しろいのは、一疋びき帽子ぼうしへ來きて留とまつて、眉毛まゆげの前さきへ、
羽はねを閃ひらめかすぢやありませんか。

「御免ごめんなせえまし。」

「へい、眞平まっぴら、」

と二人ふたりで前まへを通とほつた百姓ひやくしやうが、どちらも肥料こえ桶たこを擔かつ
いで居ゐます。其そのの頬被ほくかぶりをしない、頭髪かみが伸のびて、耳みみ
へ被かつた少わかい方ほうが吉松きちまつでした。」

「成程なるほど。」

と思おもはず云いつて、何なぜ爲がか深ふかく考かんがへたのである。

「お話はなしを伺うかがへば、そりや屹きつと庚申塚かうしんづかへ挨拶あいさつをした
ものでせうが、——何なにしろ、氣きが昂たかぶつてるん
だから、悪代官あくだいくわん、又此處またこゝで大得意だいたくいで、應あゝ、と頷あごで答こた
へたばかり。への字形じなりに半分はんぶん起きて、傲然がうぜんとして見み
送くりました。小作人こさくじんが敬禮けいらいをして通とほつた氣き、領主りやうしゆが
其そのの支配地しはいちへ臨のぞんだ勢いきほひだから驚おどろくでせう。

と寂い顔する。

「折曲つて、ひよつくら行く。あの大根畑は、唐辛子が縁を取つて、此方の水岸には、曼珠沙華が血のやうに燃えて居たに、最う孰方も無い。其のかはり、向うの山の裾に黄色だつた粟畑が、眞白な蕎麥畑になつて根が赤らんだ。然うだ、東京へも五六度行つたり來たり、久濶、と思ふと、急に堪らなくなつて、すつくり立つて、杖を支きましたが、歩行出さう、としてみ返ると、今度は、良遠くなつて、日影を行く吉松の後影　――」

あゝ、しかし、肥料桶を振つて、臀で調子を取りながら、太脛を搔込んで、しゃんと成つて、發奮んで出る　――　あの、呼吸、うまいよ、彼處だけは己も敵はん。

と嘲つて唾を吐いた。何うです、代官根性を發揮したもんですね。」

「小流こながれに添そつて歩あるきましたが、村むらの者ものを侮辱ぶじよくした、今いまの擧動きよどうを憤いきどほつたか、其それとも、里さとがめつきりと寒さむくなる前兆ぜんてうか、用水ようすいの堰せきの、淀よどんで一段落だんおちる處ところが、ぶつ／＼泡立あわたつて、眞白まっしろに綿わたを累かさねて居ゐる。

無意味むいみに杖ステッキを突刺つきさすと、他愛たわいなく白泡しらあわが包くるまつて、ふよ／＼絡まっはつて上あがる處ところを、抜ぬいて日ひにかざすと、びしや／＼消きえる。杖ステッキの尖さきは、早はや前途むかうに、粗あらい鉛筆えんぴつ畫くわのやうな柳やなぎの枝えだへ届といたんです。

可懐なつかしい　　ー　　否々いや／＼、可懐なつかしいは人柄ひとがら過ぎる　　ー　　美しい顔かほを見みよう。

奥深おくぶかい處ところですから、山やまが垣根かきねで、別べつに木戸きとを附つけた圍かこひもない、突如縁先いきなりえんさき。雨落あまおちの處ところへ入はいりましたが、寂しんとして居ゐる　　ー　　破障子やぶれしやつじの裏うちは例れいに因よつて、薄うす暗くらい。厚あつぼつたい藁屋わらやの軒のきの、斜なぐめに切きれた小口こくちはづれに、仰向あをむいて空そらを見みると、頃日このころの空模そらも様やうで、裏山うらやまのナダレから颯さつと日ひが蔭かげつて來きましたつけ。

コトコトノ、飼秣桶を靜に横木に振當てる音が
する。――其の厩の前へ出向いて行つて、

『馬鹿、』とね、あの、ポンと言ひさうな張切
つた鼻頭へ浴びせましたが、悪い氣で言つたんぢや
ない、我儘者のお世辭でした。ですから獨で莞爾し
ました。あの、廂から仰向いて空を視めた工合と言
ひ、鼻の下の伸びた、と言ふのは、こんな時の形容
でせうか。』

聞く者は無言で聞く。

「御覽なさい、人を人とも思はない上調子で、知
里里里、古呂呂、古呂呂、と直ぐ耳許で聞えたん
です。」

『居るかい、』
と大きな聲して、其の籠の掛つた、納戸の縁の方
へ歩行きながら、

『又頬白鳥を見に來たよ、』
と言つて、籠の下
へ突立つと、鳥はぴつたり鳴止んで、直ぐにかた／

、留木を踏む、物静な障子の中で、しと／＼と、
何だか柔かな物を摺らす音がする。

片端の障子の隅を細目に、二娜と婦が立つたんで
す。透切れの二個處ある、黒縹子の襟の掛つた寝衣、
藍とお納戸の立縞が古ぼけたから霞が懸つて、色が
朧の袷一枚。寝て居たんで端折を占めないから、裾
が落ちて、朽葉色の片褸が、ちらりと小さな足を、
這つて、する／＼と翻つて敷居に引いた。其を引上
げようとすると、拇指が上へ反つて、膚の綺麗な胸が
開いて、襟の膨りした兩の乳房、痛みはしまいかと
思ふ、兩方障子の棧と柱とで、しつくりと劃つた
姿で、今巻掛けた帯の先を、後ろ手に抱へ上げた、
肩を柔に力を張つて、顔は俯向いて居ましたが、櫛
巻だつた髪は、耳に濃く懸つたばかりで、
結んだ處は、障子の紙にも透かないで、半身で立つ
た。

其爪先が冷たさうに、裾を内端に搔込んで、片手で、
襟を引合せながら、

『頬白鳥は少し病氣をして居ますんですよ。』
心細さうに　でも笑ひましたよ。桑順な
眉から瞼へ染んで、薄色にほんのりして、目が平時
より、もつと涼しく見えたのは、獨で泣いて居た處
と見える。

寝ても起きてても、此婦のほか考へなかつた時です
から、直接に本人に聞いたんぢやなしに、誰からと
も知らず、家の様子の辛い事、農家の習慣とは言ふ
ものゝ、堪へない労働をさせられる事を、丁と聞いて
知つて居ましたものね。

『こんな中に居るからだ。だから病氣になるん
だ。』

と言つて、杖で籠を突いたが、揺りはしなかつた。

『お前、可哀相だな。』

と小鳥と兩方を熟と見た時、ばら／＼と木の葉が
散つて、私の背、障子、お民の帯に懸りました。竦
然と冷くなる、と雨が白く、晃然と銀の絲を捌いて、
二と日が當る。落葉の數が、青いの、赤いの、半ば

黄色きいろなものも、ちら／＼して、其處そこに立たった婦をんなの姿すがたが、
輝かがやくやうに美うつくしい、と思おもふ間まに、忽たちまち眞暗まつくらになつて、
ざつと云いふ雨あめの音おと。廐うまやで眞白まっしろな呼い吸きを吹ふきました。」

世嗣の君の物語に、此の時聊か間隙があつた。聞く者は唯、潤紅、淺緑、星の閃めくが如き木の葉の雨を縫つて日の面に飛交ふ奥に、美人が、古障子に白々と手を掛けて、もつれ髪して立つたと言ふ、髻たる其の面影に憧れつゝ、

庭の落葉か、村雨か、搔鳴らす琴の音歟。人に知られぬ我袖に、餘りて洩るゝ涙

とか、うる覚えの明石の組が胸に浮んだ。

「ー やあ、戸外は何うして、其處どころの風ぢやない。爺様が出た後を、直ぐに閉込んだ棟の下も、山が焼けるかと、明さが凄いほど、先刻の黒雲は吹飛んで、晴切つたものらしい。世嗣の眉宇に煩悶の曇のあるのは、一入歴然と認められる。

「少時してから、私だちは、背戸の流に臨んだ、柳の樹の許に居ました。ー で、故と聲を勵ま

して言つて聞かした。

「何だい、頼白鳥が遁げた位で泣くなんて、そんな、そんな奴があるか。何だ、」

黙つてますからね、柳の枝を引張りながら、同じしなやかさだと思ふ、婦の肩へ手を掛けて、春の風ほど揺つて見たが、

「だつて　　とまだ拉聲で居りませう。

「何、馬鹿な、誰か言句を言つたらな、己だと言へ、己だと言へよ。」

「そんな事を、
ツて顔を上げたが、目に一杯涙を溜めてた。で、
何です、病氣だと言つたに、此處へ呼吸を切つて
駆出したんで、顔の色が蒼白かつた。こりや、其の
或言葉の機会に、籠を開けて私が頼白鳥を放したか
らです。」

「己だと言つては迷惑になるだらう、と遠慮をするのか、何が迷惑だ、又迷惑をしたつて構はん。迷惑するのを迷惑だと思つて迷惑する。そんな卑怯なんぢやない。」

婆々、吉松、誰でも構はん。何うしたと聞いたら、己だと言へ。己だが何うした、と言へ、構ふもんか。

姉さん ー

頬白鳥ばかりぢやない、お前もだ。鳥が籠に居て病氣をするやうに、こんな家に引込んであるから、煩つたり泣いたりする。出ツ了へよ、こんな家が何だ。直ぐに出る。其のなりで構やしない、今からでも連れて行くから、」

「連れて行く、とおつしやつて、」
と不思議さうな顔をしました。其時、何處が高い處で、頬白鳥が啼いたんです。

「聞いた？ 彼を。見たが可い、頬白鳥は其の行く處へ行つたんだ。お前も行く處へ行くんぢやない」

か。
』

『私が、私が
とばかり言ふ。

『お前が、何だ、
と故に迫ると、

『私の行く處とおつしやつて、どうして實家へ

皆まで言はせないで、

『實家へ？ 誰が實家へ歸れと言ふ？ 私が縁家
に厭きたつて、實家へ歸る奴があるもんか。勿論、
其の實家の父親なり、阿母なり

此の時はじめて聞きました。其までは、誰の子だ
か何處の娘だか知りやしません。

『お前兩親は、
否、』

と掠かすんだ聲こゑをして、

「父親ちちおやばかりでござんすの。」

「然さ、うか、ぢやあー 己おれが其その實家さとの父親おやぢなら、おほ、然さうか、よく歸かへつて來きた、で事ことは濟すむが、お前まへン許とこのは然さうは行ゆくまい。」

「はい、些ちつとでも曲まがつた事ことは大嫌だいきらひな人ひとですか
ら、」

「曲まがるか曲まがらぬか、そんな事ことは風次第かぜしだい、水次第みづしだい、此この柳やなぎの枝えだだよ。けれども、何なにしろ己おれの云いふ道理だうりな
んざ、お前まへの親おやにはりやしない。」

決して實家さとへ歸かへれと言いふんぢやないのだ、姉ねえさ

ん、
「と言いつて摺寄すりよめましてね。」

「何だか、四邊は見られました。ほんの通雨だつ
 たんですから、婆も吉松も唯首を上げて見たばかり、
 田畝に居なりと見えて歸つちや來ません。目の前の
 山のナグレは、枯残つた尾花ばかり。赭土の處々、
 松のすく／＼した、唯ある梢を、ゆらりと潜つた鳥
 が一羽、翼の色も明白に見透いたが、頬白鳥ぢやな
 い、雀でした。」

「小鳥だつて、一旦籠に捉まつたとすると、今度
 飛出した時に、舊の巢へ歸るか何うか解らない。お
 前も行く處へ行くんだ、行く處へ。頬白鳥は何處へ
 行つたか知らんが、お前の行く處は外にはない、己
 の許へ來るんぢやないか。」
 と言つた時は、何故か肩が聳えたんです。汝達が
 目には御殿とも言つべき、我が館へ引取る、と言
 ふ意氣組ですから。」

婦は、

「え、」

と言つた。

それ、驚いたぢやありませんか。私は、婦が嬉しさに卒倒するだらうくらゐに堅く自ら信じて居たんです。尤も串戯とは思はせないほど、辭氣ともに激しかつた。

案外　――　然も、沈んだ落着いた顔をして、

『そんな事が、私に、』

と身體を避けて、蹠踉けて後を向かうとしますから、柳を中に、

『何故出來んのだ。』

と、ぐいと袂を取る。

『内に』

と嘸と聞えます。私は傲然とした。

『何、内に、内に濟まん。何が濟まん。菜葉に黍か
養はれて居て、其で不義理をするなら、或はそりや
不都合かも知れん。其だつて、勝手な奴が勝手に不
都合にして、不都合だ、と怒鳴るばかり。』

況やだ、他の者に心を移すと同時に、衣食住の勘定を済して、再び内の世話にらんで、己に引取られる分にや仔細はなからう。

又有つても、己が立派になくして見せる

□

□それぢや、□

と思ひも掛けず、力のある聲して、

□婦人の道が、□

と口惜しさうに云ひました。屹とした眉が一字に、清しい目を睜つたんです。

□其處だ、□

と言つて、私は悠然として微笑みました。

□多分、丁ど其奴を言ひ出しさうな處と思つて居

たよ、□

と待構へた、と言ふ風に、

「實は、私も待ちました。」

と聞き居る不行者、此方も腕を撫でつゝ摺寄つた。

「其處でズ。

「姉さん、其の事だよ。婦の道、

――男の道

――男は此處に話が別だ

其の婦の道

だ。が、官道か、私道か、田畝道か何か知らん、そんな物は、何時誰が、鋤、シヤヴルを持つて拵へたい。

一夜に富士山が顯はれた、と言ふ時にも、天から扱帯を下げ、地に繻子の帯を開いて、是が、婦人の道である、と言つた験を聞かんぜ。

元來、人間で勝手に拵へた道ぢやないか。勝手に人間の拵へた道なら、勝手に人間が踏破るに何がある。然も踏破ると、危く溝へでも落ちるんならだが、然うぢやない。楽しい美しい花園だの、熟した旨い木の實なんかは、其の道の外に、其の掟の外に、其の規を超えた、其の圍を出た處にある。

是を、食物を強請る小兒に、恣に其の求むるものを與へない親にたとへるか。親は、與へたい、遣りたいけれども、食べさせるより、與へるより、品物

のなくなるより、一倍の苦痛を堪へて、兒の健康のために忍ぶ、可愛いから與らないんだ。

が、婦の道を拵へた奴は、然うぢやない。妬しくつて圍つたんだ、吝で矢來を結つたんだ。惜さに堀を拵たんぢやないか。それも、地主なら未だしも可い、しみつたれな居候が、撮食ひを、大切に袂に藏つて置くのよ。」

「其の、お前」

何だか、貴下に言ふやうに聞えます、」

と世嗣の君は怯んで見える。此方は何にも言はないで、唯、

「先づ、先づ」

「

「木や竹で、歩行くこと、働くこと

の出来ないものなら知らん事、手足を自然に授かつた、清い目のある、姉さん、お前 否、婦

人たちが、何の因果で、詰らん道なんか守つて居る。

併し、彼は貞女だ、と言つて人が讚めるか、あゝ、賢女だ、と云つて感心するか。成程、お前は貞女と言はれて居る、賢女だ、と言はれて居よう。

其の賞められ、感心をされるのが、舞臺へ立つた俳優の評判がどのものがあるかい、 有る

まい。恐らく鎮守祭禮の棧敷に掛つた、太神樂にも及びやしないよ。――馬鹿な、詰らん話ぢやあ

ないか。

此の袋田の貞女なんぞ
柳の樹のお民と
言ふ、美名が後の世に傳はつたつて、一年太郎作が
畠の芋蔓が、丈一丈に出来た事や、三股の大根の生
えた事、檀那寺の三毛猫が上手に鼠を捕つたと言ふ
話の序に、人の口の端にかゝるに過ぎんぜ。

尤と飛んで、（此村に貞女あり、）と谷戸の
入口に榜示杭が建つた處で、其が直ちに、傾いた曲
つた小屋の、突支棒に成るんぢやなからう。其とも
操を守るがために、美しい衣服を着て、旨い物を喰
つて、唧楊枝で端然と坐つて居られる、と言ふなら
だ。操正しい、賢女だ、節婦だと言はれるために、
弱い身體を人一倍苦勞して、婆にや苛められ、小女
にや小撞かれる、見る、そんな破れた襟の半纏着
で、
と言ふと、眞白な咽喉を、取つて引緊められたや
うに、胸を抱いた。

「菜ツ葉を嚼つて水を飲んでる貞女が何だい。」

と私は豫て婆どもの事を知つて居たから、饒舌る内にも勢づいて、満腔の供氣、渠を救ふに、敢て世に憚らん氣がして来て、

「貞女の胸にや瓔珞が掛つて、淫婦の帯を蛇が巻いてる、と云ふ例を聞かん。」

善不善、それ／＼に、自然の報があると云ふのか。此家へ縁附いて何年経つ。一度も、どんなか果報があつたか。ありやしまい。今己に若し救出されて、其を人非人だ、不埒だ、と勝手な事を云ふ奴等に、お前を着飾らせて見せたら何うする？ 金剛石で、翡翠玉で、其の美しい指を輝かせて見せたら何うか。袋田村の貞女を廢める！」

お民の、然も一生懸命らしく、負けまい、屈せまいとするやうに、仰いで睜つて居た目は、何時の間にか水の流に伏目になつて、枝に頸を垂れながら、其の思は肩に籠つて、優しく拗ねた風情がある。

「まだ、分らんのか。」

と私は兩手で犇と柳の樹を壓した、枝がふら／＼

と靡いたんです。

「第一お前は、此の柳の茂った色を外から覗いて、暮し向きを床しがつて、だまされて来たんぢやないか。約束をした亭主も、惚れた夫も何にもない。人は違ふが、まるで、然うすりや、雪の朝、餌に餓えて、弟の奴にたばかられて捕まつた鳥と同一事さ。

其だつて、餌を飼はれりや、よく懐いて、手を叩けば来る、呼べば鳴く。――あゝ、可愛い、恩を知つて、とか何とか言ふだらう。馬鹿な、人間が勝手に言ふのよ。――婦の道と同一さな。

頬白鳥の方ぢや迷惑だ、が、悲い事には、餓いに替へられんから、其處で己を囚にした敵にも懐くん
だ。――お前が婆に苛められても
腰を擦つて、齊眉いてるのも然うぢやないか。

人の目にや、よく馴れた、可懐いた、と思ふ頬白鳥が、おい、何うしたよ、己が手を掛けて戸を開けりや、兩の羽を羽搏つて飛んだぜ。お前は、まあ、

あんなに可愛がつて遣つたものを、不人情だ、薄情だ、と思ふだらう。そりや勝手だ、我儘ぢやないか、何うだ。」

『まあ！』

『否とは言へまい、否、否とは言へまい。頬白鳥は他に佳い處があるんだから、行きたい花園があるんだから、欲しい木の實があるんだからよ。此内も其の通り、頬白鳥に於けるお前と一つだ。不人情だ、薄情だ、と言ふだらうが、そりや、居候の禪のやうな、婦の道とか云ふものに、お前を立たせ、歩行かせて置いての事で、向うは勝手さ。むかうは其が勝手だらうが、お前はお前の勝手がある。附木で繕つた籠を抜けて、一足出りや、己が居る、己はお前の花園だよ、旨い木の實だよ』

『さあ、此の旨い木の實を遣らう、』
 と自分の懐へ、私はづつと手を入れて、

『綺麗な花園へお出で、』

と言つて、濃い柔かな束ね髪を垂れながら、指を
 反らして焦つた状で、小刻に柳が幹に觸つて居た、
 滑かな袖を取つた。取つた茨には刺があつたが、引
 かれた花は、其の手、其の襟、其の胸、其の足、瞼
 ばかりが薄紅さして、唯眞白な胡蝶のやうで、其が
 不殘、ゆら／＼戦く。

途端に皆消えた

のは、崩折れて柳の根

へ跪つたんです。片手は袖口を捲いて口を壓へた、
 顔も半分隠れましたが、取つて離さなかつた手は其
 のまゝなのを、ぐい、と下へ引かれたから、此の胸
 が被さつて、乗越して下から覗く、脇明へ冷たさう
 に、淺黄の色が絡んで見える。

何の氣なく、目を反らして、水を見ますとね。同
 じやうに常磐木の緑を透いて、雪が隠顯映るんです

ー 眞上の、ナダレの、あの女神の白身が、倒に浮いてるんで。

不圖、思着いたから疊みかけて、又恚う言つた。

『見なよ。此處に、此の水に映るのは何だ。』

と眞直ぐに指さすと、ちら／＼と其の映つたのが、底から玉のやうに湧いて動く ー

お民も、熟と覗きましたが、

『朝晩見て居よう、こりや裸體の婦だ。 ー

此だがね、今此處でお前が全て衣服を脱いだら、人は何と思ふ。』

と言つた時にや、フイと顔を背けました。餘りだ、と極が悪さうに。

私は猶豫らはず捲し掛けた。

『衆何うする、何と言ふ ー 出來ん、そりや出來ない。お前が己に聞いて、家を棄てる事を、人に對し、世間を兼ねて仕得ないのは、恰も此の庭で、白晝裸體になつて突立つのを憚るやうなもんだらう

ー 人が見て何と言はう、指して何うするか、

と思つて。

けれども、能く聞け。

村の者は、此のナダレに立つた、膚の白地な女に對つて、何う出来る、何が言へる。唯、あれ／＼と馬鹿口を開くばかりぢやないか。頓て其の美麗さに、押魂消るばかりだらう。是が西洋の女神の像だ、と聞いて、田畝で拜むやうに成らうも知れない。

是とても、場所が場所、畦道にでもあつて見る。土を捏ねた泥ツ手で、奴等ア密と胸を撫で、見ようも知れん。淺ましい、と云つて、唾も吐きかけようし、草鞋を拾つて打つける小兒もあるんだ。――處を、立流な持主が、高い處に据ゑて置けば、うっかり指さしも仕得ないぢやないか。

婆どもに苛められても、吉松の此の家の内に居ると思へばこそ、己の説に従ふについて、唾も吐かれう、草鞋も頂かされうと云ふ憂があるんだ。邸へ來い、百姓等に指だつて指さしはせん。口なんぞ利かせるもんか。

何がなし、奴等が思慮分別に突ばづれた、雲の中の女神だ、とお前を思はせるから憂慮するな。が、故郷へは錦だから、都の貴婦人となるよりも、村で肩身を廣げたからう。其も可、こんな袋

田の村一ツ、買漬して池にしようが、庭にしようが、そのくらのな事には驚かん。馬丁に前を拂はせ、馬車に乗つて衝と入れ。不義理な、人非人だと、面と向つて誰が怪我にでも言ひ得る。――又、奴等が口を利かないのも氣にするな。偶に此方から物を言へば、月の光に倂立つて、あの女神が、微妙な聲を懸ける時、百姓が土下座して伏拜むと同一位地にお前を置くから。お民

と爾時手を離して、柳を攀づる意氣込みで、小手をナダレの女神に翳し、

「天は高い、地は潤い。雨霽れの日の黄金の綾に包まれた、別世界、白玉の女神と、翼ある兒が戀の矢を引絞つた極樂が、目の前にはないか。――外國の事と思ふな、斷念めるな。こゝにあればこゝにある、然も、此の袋田の空に靉靄くが如くにある。」

唯ただ立たて、手てを伸のばせ、直すぐに花はな園ぞのの木この實みに届とく。
『
と言いふと、魂たまがしひ入いれ變かはつたやうに、きつと立たつて、
ひしと縫すがつた、婦をんなの背せを確しつ乎かりと支さへたんですが。』

「魂が、他愛なく、我か人か、胸で一ツに成つたと思ふと、緑の葉と葉の間を抜けて、白く燃える尾花の波を、兩岐の霞のやうに、すら／＼と足を、迂らして來て、目前へ立つたのは等身の女神の像で、端麗な其の顔は、何故か、不思議に唇だけが、私の顎の下に紅かつた。

あの女神の顔が、餘り能くお民に似て居ると、何時も思つて居たからでせう。

をんな
婦は活々した嬉しさうな聲になつて、女神は兎に角、可愛らしくツてならなかつた、羽の生えた小兒は？ ツて聞きますから、矢の講釋を手眞似でしながら、
「あゝ放した、それ刺つたぞ、
と云ふ時、指環を抜いて、婦の胸へ。
此がヒヤリとしたと見えて、

「あゝ」
と言ふ、其の拍子に、漸と分れて歸りました。

これだけの隙はあつたけれども、連出す約束をしたのは、未だ其の折ではなかつたんです。

處が、お民と、ふとした行係になつてからは、其までの打壊し主義、敵役の代官が、打つて變つて、首尾よく成就させたい氣がし出したので、妙に遠慮勝になつて、前のやうに、づか／＼出入りが出来ません。が餘所ながらも、様子を見ないぢや居られんから、其處で、此方の塚の傍を畝つて上る、搦手の路を發見しました。

御存じの、石碑の裏を、馬の鬣なんぞ分けるやうに、尾花を踏んで、束ね放しの粗朶が、ころりと寝たり、仰向けに路に轉つたり、ごろ／＼して居る上を跨いで、無暗と、攀上つて、方角を見い／＼、雑木林を突切ると、峰へ出るんですね。

頂は三四百坪　　―　　―　　廣場ですから、見た目には狭くつても、あれで五六百坪はあるかも知れん、平地ならしが出来て居ますが、しばらく打棄つてあるらしい、枯草が茫茫、眞中に、十字が建てゝあり

ます。

端へ出ると、あの女神像は、恚う張の好い腰へ、
ふつくり搔込んだ、柔かな背筋が、些と窪過ぎたか
と思ふほどに、浮いた肩先が四五寸、峰を抜いて立
つて居ます。近づいて、はじめて知つた、波がしら
が裾へ立つた石の臺に取附けてあるんです。愛神は
上から見ても、矢張高く松の枝に架つて居る。まだ、
肱をまげて、長く成つて、すらりと足を投げて、胸
が連のやうに横に寝た、女神の像が最一つある。

其の間へ、足を落して、山の端へ腰を掛ける、と
廐も藁屋も、柳にかゝつた繪馬か、と見える。吉松
の構内を瞰下ろすと、ちよろ／＼と流れる水も、雲
に遙に連なつて、蒼空の中から鱗を洩らして、磯馴
松を絡つた海も、どれも同一水の色です。私は獨で
豪くなつた――頑迷な、馬鹿律義な、舊弊な、
愚者どもの眼を覺し、舊き道德を滅して、新なる、
知慧に、自由に、自然に蘇生らせる大海嘯に棹して
来た、波の上なる女神の夫だ――雲の端に手を
翳した豫言者の意氣組で。

本を開いて見るやうに、帽子の下から、下の様子
を窺つちや歸りました。幾日か然うしました。僥倖
に天氣續き、其の節此の風に

みり／＼梁が撓んで鳴る。

「今日のやうなのに吹かれると、天上へ飛ぶか、
廐の中へ突落される處でした。」

現に昨日も、又然うして居たのを、柳の根へ来て、
お民の手が梢に搦んで私を招く――最も彼處か
らは下りられませんが、呼ぶ程だから差支へはある
まい、と元の庚申塚へ廻つて、急いで吉松の内へ行
つて、何時かの時と同じやうな事があり
ました。で、密と話をして、昨夜の其の事、遁げて
出よう、迎ひに来よう、と約束をしたのでした。」

「此處で矛盾したのは、豪さうに自分だけの新思潮の潮先に立つて、袋田の奥へ海嘯の如く押寄せて、美人を犠牲に取つて凱旋する勢の奴が——婦を連れて遁げるのに、夜を選んだのは可訝いせう——尤も私の發議ぢやない。先からの行係りでも、卑怯な夜遁げは不可ん、白晝大手を振つて出る、と附元氣をして見たが、婦が斷じて肯きません。

又私も、何うやら村を連出すのに、人目をく
 私も、何うやら村を連出すのに、人目をく 又私も、
 何うやら村を連出すのに、人目を忍んで、薄尾花
 にまで心を置くと云ふ方が、妙に嬉しい氣がしたん
 で、ぢやあ、間違へるな、「今夜、」
 「吃と、」と言を番へた。いや、其の爲に飛だ間
 違ひが起りましたよ。考へて見りや、婦も町へ用た
 しに出る風で、晝間の方が却つて都合が好かりさう
 なものだのに。——

一方には、連出して一先づ藏匿ふ處を拵へて置い

て、愈々、昨夜月を辿つて、來掛つたんです。時間も粗た打合せをして置いた。一時頃までは村の若い者が町方へ賭博に出る歸途がある、三時過ぎると、最上絲工場へ通ふ早出の職工が通る、其の間、と兩方から切詰めたから、窮屈な時間です。

丁どお宅の前あたりで、鶏がないたのを聞いて、吃驚して、後れたか、と時計を出して、月影に透かしたが、一番鶏。

此の通り、山の裾がぐるりと取廻して居ますから、夜は洞穴を抜けるやうで、大な白い蝙蝠ぢやないが、枯尾花の穂が、ちら／＼する。水田は一面に黒ずんで、どんよりした底光、死んだ湖を見るやうでせう。山の面は眞蒼で、處々灰色の骨が出て、遠いのは腰、近いのは頭に、白く冷い霧が薄り掛つて、其が動くやうな、動かないやうな、宛然大濤の幽霊かと思はれる。今日の風が吹く前觸だつたか、其は／＼寂としたものでした。

又何も、昨夜に限つたんぢやありませんまいが、然

うした月夜の習ひで、立木なぞ片面が明いと、裏は
餘計に暗いんですね。引いた足が暗いと、踏出す處
がぱつと明い。路傍の枯樹の枝が、ブツきり刺さり
さうに足の甲へ映るかと思ふと、爪尖の土からは、
ぼうと薄煙が立ちます、――好鹽梅に、寒さは
骨に透るほどぢやなかつた。何の、そんな事は氣に
なりませんね。吉松の近くへ行くと、彼處の取付が、
雑木山で、空から樹の蔭が一束になつて押被さつて
暗いんです。門の前は、眼が覺めるほど明るくつて、
而して、山の行留りの所爲か、霧が又一際濃くつて、
ばた／＼音がしさうに、厚ぼつたく累つて、ふつく
りと月を乗せて居ました。

脱つた、暗號の約束をして置かなんだ、とげつそ
り心寂しくなりましたつけ。ばた／＼ば
た／＼、鶏の羽音がした。急に胸が轟きました。
――確に吉松の家の鶏小屋で、ケツケツと
けた／＼ましく騒立つ――何處かで、ウツウと牛
が鳴く。

握拳ほどの影が出て、明るい處へ、すつと擴がつ

た、と思ふと顔の白い、茫とした、裾の蒼いのが立ちました。私は夢かと思つた。

「お民、」

とはつと出る、と何にも言はずに、此の時は婦の方から、確乎私に取纏つて、ぴつたりと袂を摺寄せました。

「

行かう！」

」

と其なり、私は婦の袖口へ手を掛けたが、――

それぢや そんな事を、 下着

を着換へて居つたんですね。―― 冷く觸つて、掌にぶる／＼動きました。

其處へ、一寸立停まつて、直ぐに突出された風で、足を揃へてする／＼と歩行き出した。

左手

の私の横合ひから、のつそり白犬が跟けて来る。家を早や遠ざかつた。あの塚が見える處で、前脚をひよいと出して、面を振向けて、膝

の處ところを、クンと嗅かぐ。

『畜生ちくじやう』

と叱しかると、うゝと可厭いやな聲こゑを出だしたんですがね。
」

「私は、悪いものを持つて居ました。昨夜なんざ、特に敵地へ臨む氣ですから、袂に短銃があつた。」

唸りながら頸を伸ばして、虜の畜生、鼻尖を擦りつけたが、直ぐに嗅いだと見えて、翻然と三尺、地摺りに退つて、怪しからず吠えたんです。お民が、貴下、

「何ですね。」

ツて一足出て、一寸腰を屈めながら、頭を壓へて、ぐつと壓して、

「白ぢやないかねえ。」

然うすると、畜生、鼻頭を仰向けて、霧を吸ふやうな大口を開いて、ぺろ／＼と嘗めようとする。お民が袖の下へ手を隠すと、向をかへて、ふら／＼田のふちを傳つたが、矢のやうに颯と飛んで、何處へか見えなくなりました。

お民が其まゝ足を留めて、

『可厭なねえ、内へ吩咐けに行きはしますまいか。』

『今まで見懸けない犬だ、お前ン許のか。』

『否、餘所のです。』

と言ふから、私も何うやら安心しました。

『飼主が、寶物を穿出す夢でも見るだらう。さあ、構はず行かうよ、急いで、』

『はい。』

其まゝすた／＼と歩行き出した。些とは落着いたものらしい。其の時はじめて、自分たちの聲音が耳に入つたんです。が、少時すると、はた、と其の一ツが留まりました。妙に、八九枚田を隔てた對方の山の裾で、其の響が止んだらしい氣がします。遠くで　　ー　　大方、ぴた／＼ぴた／＼、訝とか言ふものがして居たからでせう。

『あら』

『』

『』

『』

「若様、」

と聲が變る。

「何だ、」

「誰か呼びはいたしませんか。」

「誰を、」

「私、」

「誰が、」

「（お民ツて、）

おほ、又

（何處へ行ツて、

あ、」

と言ふ、と最う調子が上ずつて、確乎、私に掴つ
たんです。――私は、的なしにきよろ／＼しまし
た。

少時、身動きもしなかつたが、堅くなつた婦の身
體が、ぶる／＼と震へた、と思ふと、

「庚。――申。――塚で呼ぶんですよ。」

と言つたのが、私の連れた婦ぢやなくて、遠くで、
今、聲音が笏を返したと同一に聞える。

私も何だか慄然としました。

「庚申塚で呼んだんですよ、――（何處へ行

く お民！） ツて、

とわな／＼する。

『庚申塚に、誰が居る。』

『否、お庚申様ですよ、何うしませう。』

と蒼くなつた。

『何、あの塚が物を言ふ？ 馬鹿な事を！』

自分ぢや却つて安堵して、低聲で笑つて、而して、
婦の氣を休めるために、づか／＼と寄つて、恐氣も
なく、――不作法に顔を突出して、蒼白い石碑の、
周囲が蔭に成つて、底の浅い巖の窪に浮いた奴を覗
きました。が、猿の形が、唯、何だか混沌とした、
大きなものゝ胎内に宿つた、乳汁に包まれた不氣味
な小兒のやうに見えました。

雖、何となく其に目が引附けられて、岩に冷く
瞳が据わると、あの三方へ三體刻んだのが、孰から
始めたか、ぐる／＼ぐる。はつと思ふと、又舊の處
へ朦朧として居直つた。

吃驚して退りましたが、無論、こりや自分の目の
所爲だ、と考へたし、又自から敢て恐れない事を證
據立てるために、

平氣な風で、

「何でもないぢやないか、來ないか。」

と呼ぶと、婦は元の處に立竈んで居て動かしたので、

「來ないのかい。」

と促しますとね、纔に身體を動かしたが、私に其
處へ來て欲しい、と云ふ仕打なりました。」

「勢よく引返すと、継りついて、耳へ囁かうとして、口を寄せるのが、震へて、頬へ掠れるほどで、家へ歸して下さいまし、何うぞ。」

何を云ふ。馬鹿、あんなに言つて聞かしたのを忘れたのか。未だ分らんのか、婦の道なんぞ心持だけだ。此の村一つ出はづれる間のもんだ。誰に遠慮をする。些とも憂慮はないと言ふに。

「最う、最う、恚うして私、内を見棄て、來、來ましたもの、恥かしいも濟まないも、そんな事、そんな事は思ひませんが、お庚申様が」

「何、人には構はんが、庚申塚を憚るんだ？ そんな事を言ふのが、未だ魂が此の袋田の隅っこを彷徨ついで居るからだ。伸して出る。靈魂を高く持て。あのナグレの女神の姿を仰げ。――妨をする佛もあるなら、戀の權化の神もある。村の佛に世話を焼かすな。くだらない。操だ、義理だ、そんな

ものは、念ねんに懸かけるな。爪つめの垢あかほども考かんがへるなよ。
何なんだ、塚つかが、石碑せきひが、何なんだい。己おれの婦をんなの邪魔じやまをして
又また麥飯むぎめしを食くはせるのか。』

と激烈げきれつに遣附やつけたが、何故なぜか、唾つが乾かわいて不可いん
のです。—— こんな事ことぢや駄目だめだ、と思おもつて、躍やつ
起きとなつて、

『えゝ！目觸めふりになる關所せきしよなら、突破つきやぶつて通とほして
遣やらう。』

奮然ふんぜんと、躍上をどりあがる勢いきほひで、月影つきかげを颯さつと亂みだして庚申塚かうしんづかへ
武者振むしやぶりついた。婦をんなは引留ひきとめもしなかつたんです。
聲こゑが出でなかつたんぢやない。幾干いくらか、私わたしを便たよりにし
て、何どのくらゐに反抗はんかうが出来るか、其それを見みた上うへで、
最もう一度決心どけっしんしようとしたらしい。

變へんでしたよ。奮發懸はずみかゝつて、ドンと突つかうとした手て
が空くうを切きる。石いしに些ちつとも届とどかんのですね。其處そこに、
目めの前に、月つきの暈かざを見るやうな、輪廓りんくわくがある癖くせに

これは、と思つて、又押したが當りません。赫として、二三度拳を揮廻はすと、力が餘つて、ぐるりと背後向になりました。

其時不圖見た、月の色が、何とも言へず蒼かつたんです——

婦は、と見ると、

『呀！』

何うしたか、ばツたり地に倒れて居るんでせう。

『瘡氣むか。』

『お遁げ　お逃げなさいまし。今、今、

塚の前へお立ちあそばしたお身體が、眞白な煙になつて！』

『えゝ！』

『消え、消えるやうに、見えたんですもの。私、最う可恐い、どうぞ、どうぞ。』

と、舊來た家の方へ、居膝つて、袖を落して、腰を引摺る。其に續いて思はず、ふら／＼と歩行きました。婦が又、「あツ」と言ふ——戻らうと

する畦路にも、山の根にも、樹の下にも、大勢影のやうな人が立つて見て居る。――と言つて窺むんです。

「土、土百姓ども。さあ、誰でも来い。操だの、義理だの、そんなものは、き様達の大根畑にや肥料を被つて生えて居ようが、己の方にや、怪我にも無いんだ。無いと云ふに何うするてんだい。己が此の婦を連れて行く。文句がある奴あ、此處へ出る。何者だ。」とくら／＼して目も眩んだんでせう、誰も見えんが、居ると云ふから叱りつけた。

「あれ、もし、もし、」
と婦が下から、胸へ攣るやうに膝を立て、
「否、（否、決して言句は申上げん、唯私をお連れ遊ばして、お通りの處を、黙つて見て居るのぢや、）と言つてゝす。（樹も、草も、お月様も、皆が見てござるぢやないか。）ツて、然う言ひますよ。（誰もお邪魔はしませんから、ぶん／＼行かつしやい。）ツて。――え、え、誰？誰方？まあ、あゝ、墓から出て來た、袋田の爺婆だつて。

あれえ、あれえ！』

とのつけに反る。橋のやうになつた胸を、兩腕で、
ぐい、と抱いた。

私も夢中で、

『うむ、見物しろ。殿様が御通りだ。』と言ひ
さまに、白々と足をさげて、月にながツくりと仰向く
婦を、宙へ。大股に歩きましたが、庚申塚を抜け
よとすると

世嗣の君は大息を吐くのであつた。

「急に重量が掛つて、我慢にも腕が痺れて、抱いて居た手を放すと、氣絶して居たと言ふんぢやありませんから、頭は落ちないで起返つて、塚の礎に手を突いて、身體を支へた時でした。」

「あゝ、あゝ、顔の赧い大きな物が、木の葉を食べて
と恍惚して、熟と見ながら判然と云ふかと思へば、

「あ、
と髪を散らして、突伏して了つたんです。」

顔も上げずに、私は是なり成るやうになりませう、歸つて下さい、遁げて欲しい、最う夜があける、と身を揉みます。霧がむく／＼動いて来て、一面に田の上へ、波が寄るかと思ひます。――斯うなつちや、若し人に見られると、私が居ては尚ほ婦のため、に悪からう、と思ひましたから――とぼ／＼歩行出して、振返つて見る内に、霧が段々、あの、其の墨繪のやうな姿の上へ、累り／＼、やがて、私の

身體を袋田から押出すやうに、後を壓へて擴がりま
した。」

扱は袋田の、今朝の靄の濃かつたのは、恚る秘密
が包まれたのであつた。

戸にカタリと打附かつて、ほうと言つて、六兵衛
爺様が歸る。

で、世嗣の君は懸念に堪へず、お民の成行きを見
定めようと、出直つて来たことは言ふまでもないが、
庚申塚で行惱んだのは、吹く風の威力ばかりではな
かつたのである。然るにても延寶八年の、其の奇し
き塚が、――海嘯が山の奥を浸した時――
祖先の手に建てられた、遠慮のほどが思ひ當る。

時に、恚う打明けて、世嗣の君が懺悔した趣意と
云ふのは、聞くが如き悲境に落ちたお民の救を求め
たのである。

仰せまでもない。中空には、はた波を踏んだ女神もあるのに、お民は厩で縛められた、――止まぬな！此の風。あはれ牛頭馬頭に追立てられ、裳が炎に乗つたと云ふ、疾く先づ其の繩を切解かう。

次の夜、伯爵の世嗣が、疊屋に再び訪れた時は、馬丁體のものが附いて、麥酒を束にして持つて来た。別に肴があつたので、爺様は例の手酌で獨りで飲んで、宵の内にごろりと寝たが、主客は火燧に差向ひで、耳も顔も熱くなるまで相語つた。行者が醫師で、風邪ぐらゐは、村の者に薬を盛つた信用から、兎も角も亂心でないのを悟して、お民の繩は解かせた、と言ふので、世嗣も落着いて、猶悉しく當時の状を繰返した。――此まで記したのは、二度のを纏めて一つに綴つたことを言つて置かねばならぬ。

――さて又打つて變つた今夜の風、天井で鼠は騒ぐが、戸外の氣勢は寂として、霜の降るのが犇々と身に應へる。

續きは忘れたが、世嗣の君は炬燵檜へ肱を掛けて、

此方へ押寄せるが如くに凭れながら、

「貴下は何う思ひますか。」と急に尋ねた。

「何でございます。」

「婦ですよ。お民があのからみな容色と、氣立を
持ちながら、こんな村の隅つこに、埋木に成つて一
生を暮すのは可哀相とは思ひませんか。前生の約束
と云ふやうな、愚な事でも考へないぢや、馬鹿々々
しいと思ふんです。」

一生襤褸を着て、糠を食つて、土穿りをしつゝ枯
木に成つて朽ちるほどなら、人に何と言はれたつて、
たかゞ一村一里の批判です。外國と戦争した時の破
裂彈のやうに、日本中響き渡ると云ふんぢやない、
構ふもんですか。――而して榮耀榮華をして貴
婦人と言はれて、化粧料の殘餘で慈善事業でもした
方が幾干増か知れんと思ふ。何うでせう。」

「何うも些と何うも其は、」

とばかり此方は陶然として天窗を掻いた。

「お返事に窮しましたな。」

世嗣の君。

「不可いでせうか。」

「何ういたしまして、一々御道理のやうで、」

「別に道理ぢやありませんよ。」と直ぐに折るのが憎くはなかつた。

「尤も、お民さんが、私のものなら直ぐに貴下に獻じます。何うも其の方が婦に取つて幸福のやうだぢやない、確に幸福かも知れんから、貧乏人が碌に食ふものも食はせないで、我が面をする権利はない、差上げますとも。」

「然う云はれては——恐入つた。」

と埋めるばかりに掛蒲團に額を伏せた、此の容子に、又少からず動かされた。しばらく、途絶えて、夜が更ける。

「時に、お睡くはありませんか。」

「否、お民の事が出来てから、夜を寐ないことが

いくらもあるんで
私は些とも。しかし貴
下は？」

「私は御覽の通り　―　そりや然うと、其の肝
心の、昨夜、庚申塚をお通なさらうとする時、怪し
い聲を、」

と言ひ出したが、變に背が廣いやうで、見返ると
押入の襖に、頭の圓い影が映る、二つ二人の、が、
未だ一つあるやうな氣がして、背が寒い。

「其の聲を掛けたと云ふお話、貴下も其をお聞き
でしたかい。」

「婦の口から、不意に、（お民、何處へツて

―　お庚申様です、）と云つて震ひついたん
で、縫られた胸からかけて、ぞつと貫かれるやうで
した。爾時のお民の聲と云ふのがなかつたんです。

今もお話した通り、一度婦の咽喉から出て、田圃を
廻つて、向うの山の裾を傳つて引返して、ぐわんと
此の耳へ來た。而して、（何うしませう）　つて

悲鳴を上げられた時は、私も實際何うしようかと思
ひました。何とも言へない氣持でしたよ。」

「が、然う云つてお民さんが、ものに托して、貴下を諷したと云ふんぢやありませんかね。」

「そんな、そんな様子は更に。はじめ、

家を出る時に、小な風呂敷包一つも必ず持つて来ちやならんぞ、と云つて置きました。昨夜もたしか袖の下へ隠されるほどの品も持つちやあ居ません。

見ると、月明には寂しいほど空身で居ました。何かに託けて私を教へるくらゐなら、故にも風呂敷包ぐらゐは持つて出たらうと思ひます、駈落すると信じさせるやうに。」

「未だ何ですな、其處らに、むら／＼して、目に餘る人の姿が見えたつて事でしたな。」

「最う其時にや赫と取逆上て居たんですから、お民ばかりぢやない。木だか、石だか、筵だか、そんなものかも知れませんが、私の目には見えたんです。だから叱りつけた、怪物だつて、幽霊だつて、土百姓なんか恐れはせんのですよ。」

「しかし

」

「ですが、婦を引抱へて、塚を突貫ける力はなかつたんです。口惜いが支へられないで、何故か身體が弱りましたよ。」

「而て見ると、人間ばかりぢや、守る事も守らせる事も出来ない、力さへあれば打破ることの出来る、婦の道なぞと云ふものは、鬼神があつて、自然が命ずるのかも分りません。——他は今、差當り、あの庚申塚が、貴下方を憎んだでせう。」
時に、月天心と思ふあたりを、颯と此屋の棟へかけて、ものゝ押寄する氣勢がした。はつと言ひ合はした如く顔を見ると——星にも響かう

ひづめの音。

タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、と一壓に間近になつて、ハタ、と其の音が止んだ、と思ふと、戸に打附つた物の響、唐突に山が崩れたか、と二人とも息を詰める、咄嗟の間は動悸も止まつた。

トン／＼と叩いて、

「爺様！」

「おほ、」

目敏く爺様は應へたが、生欠伸してばやけた聲。

「誰ぢやい。」

「吉だよ、吉松だよ。大變ぢや。」

「何、大變だ、」

と行者が眞先に飛出した。びしり、と開ける、出

合頭に、髭斑な蒼い顔で、

「お民の奴が、なう、」

「うむ、」

「咽喉を突いた。國手、」

「了つた！」

と聲を上げて、爺様の寢床を飛越えると、

「わい、」

と言つて、むつくり起きたが、世嗣の君は、部屋
の口に石の如く立つて居て、

「君、君、」

とばかり言ふ。

「疾いが可い、」

心掛 聊ながら ー 繙帯ぐらゐは備へて置く。
革鞆を下げて土間へ下りると、早や、爺様が手傳つ
て、戸口に駒の頭が高い。

「さあ、乗つて駈けさつせえ。」

鐙の踏みやうも知らないのに ー 裸馬ではあ
つたけれども、何となく此の驪、其の意を得たらしく
思つたので、猶豫はらず、手をかけると誰だか足を
浮かしてくれる。鬣に掴まつて、平伏、に八夕と
伏すや、前足がポンと出た。

月下の道は流るゝばかり。

衝と庚申塚を抜ける時、駒に並んだ吉松が、

「御免なせえまし。」

と聲をかける。

「失禮、」

と行者も揖した。

背後から、

「急いで ー ー」

と山の裾に響いたが、其を振返る隙があらうか。

得物は鎌で、手負は咽喉を掻切つたが、玉の緒は未だ絶たれず。切なさに水を求めて、納戸の縁を落ちたさうで、ずる／＼這つて出た處、背戸の流の柳の根に、力なく倒れて居た。あゝ、最いう些とで口を濡らしては助かりはせん。勇んで抱起こして、兎角して、繃帯する時、夜が白む。手負は目を塞いだまゝながら、白魚の指に紅さして、頻に山へ向かうと言ふ、背を抱いて向直らせたが、一念が通じたのであらう、女神の前に、小さく黒く、世嗣の君の姿が立つた。

と、上から手眞似で聞くやうだつた。固より容體を尋ねたのであらう。下では其の答に稍猶豫つたが、此の際頭を掉るべきではない、と考へて、此方は幾度も頷いたのである。

しなしたり！ 呼吸が絶えたか、と聞いたらしい。

をんな
婦の脈を確めて、引返して来た。庚申塚の此方か
ら、靄を開いて、今朝は、いつもより一入高く、女
神の胸が雪を欺く。

とみ
唯見ると、鳩にしては稍小さい、鷗は餘り其處ま
で来ぬ、何の鳥か白いのが、ひら／＼と飛んで中空
へ舞上つた時、凍てゝ青竹の破れた音して、女神の
胸の白妙が鮮紅に颯と染まる。日の出ぬ前よ、あゝ、
其の紅　　庚申塚の朝の霜。

によしん
女神を飾つた、山の主は未だに知れぬ。

【完】